
可塑性に富む僕

永島園子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

可塑性に富む僕

【Nコード】

N1304W

【作者名】

永島園子

【あらすじ】

僕の御先祖はかなり、変わっていたらしい。

す、スライム？ えええ？

変てこな御先祖の因縁と、因縁がらみの僕の仕事？

時空を超えたボランティアなのかな？

1・適合ですか？（前書き）

一応、保険として残酷描写注意としておきますが、たぶん全年齢OKで、大丈夫です。

1・適合ですか？

「おい！どうした、いったい」

僕は途方に暮れた。

県のマラソン大会に向けての自主トレと言うか走り込みの最中で、こんなハプニングなんて想定外だ。だって、周りに人の気配は無いのにいきなり血塗れの虫の息の人間に遭遇したんだから。ビックリ仰天するだろう、普通。

まずいことに携帯は家だ。僕の足で走っても三十分は軽くなる。

人工呼吸？

ともかく止血？

心臓マッサージ？

ヤヴァい、まじでやばい。どう考えても僕一人じゃ何もろくに出来はしない。背中に背負うか？

ともかく救助の手を、そうだ、そうしよう！ それしか無い！
と言う訳で駆けだす寸前だったが、僕は踏みとどまった。

「ま、待ってくれ、これを」

血まみれの人物の声が、かすかに聞こえたからだ。

いきなり僕の手に丸い小さなものが押しつけられた。

「目に、左目に……当ててみる……」

「左目？」

「ああ。頼む、時間が……な……い」

銀色、いや、鋼色？ よくわからないが、色が無くてメタリック

に光るビー玉ほどの球体を手渡された。眼に当てるって、なんでまた？

訳がわからないが、ともかく言われた様に……

「うわああああああつ！」

激痛が、とんでもない激痛が全身を貫いた。

「ああ……適合……した」

血まみれの人物のかすれた声が聞こえて、僕は平静に戻った。いや、戻ってない。変なものが見えるのだ。

「何なんだ、これは、適合したって、いったい僕に何をしたんだオッサン！」

「すまない……事情は……おいおい、わかるはず……」

おいっ！ ええ？

おっさん、と呼んだが、もっと若いのかも知れない。眼が何とオッド・アイじゃないか。右目が金色で、左目が銀色とか、有り得ねえ……それに、身なりが変だ。ローマ帝国軍の金属鎧みたいな重そうな代物を着てる。あんまり防具としては効果的じゃないのかもしれない。だって、脇の下からちょっと前寄りの所から、ずっと血が流れているのだ。鎧の合わせ目を不味い具合に刃物でぶっ刺された、って感じた。至近距離からのだまし討ちか？

「あんた、どこの誰だ？」

「今夜、眠れば……わかる」

眠ればわかるだ？ またまたおかしな事を。ともかく常識はズレのオッサンだが、手当はしなくちゃ。

「おい、医者のところに行くぞ、おぶされ」

「む、無駄だ……ワタル・ドーメキ、新たな救世主よ、フェドンを頼む」

言い残すことは、それだけ？ って聞き返す間もなく、いきなり、ガラスが砕け散る様な音がしたと思うと、オッサンは消えてしまった。

オッサンの倒れていた形に草はなぎ倒されているが、あれほどベツトリ真っ赤だった大量の血が見当たらない。そういえば、僕の体や衣類についたはずの血まで、すっかり綺麗に無くなっている。

オッサンだけじゃなく、血までって、驚いた。驚きすぎて訳が分からない。

それにしたって謎の奇妙な玉と「適合」してから、テレビ番組の小窓と云うか子画面みたいなものが、ずっと視界の右上から消えない。今の所、僕の真後ろの風景らしきものがずっと見えている。真上なんて見えないのか？ と思ったら、急に画面が切り替わったが、空ばかりで何の参考にもならない。そう思ったら、また後ろに戻った。ひょっとしたら便利な使いこなし方が有るのかも知れないが、取扱説明書が有るわけじゃなし、いささかあっけにとられている。

僕の家は鬼の末裔だなんて言い伝えが有る古い家だ。

その先祖だつていう鬼は何でも百個の目が有ったそうだ。非常に威力のあった悪鬼で、源氏だか平家だかの強い侍大将が討ち取るまで、大いに暴れ回り人々を苦しめたのだと言う。威力って、具体的にどんな威力だったのかろくに口伝も残ってないから詳細は不明だが、色々珍妙な、怪奇な現象に遭遇する確率が高い一族らしい。

案外こんな具合に変な事に巻き込まれてたりして、苦労なさった御先祖様もいたのかも。

ともかくも、この瞬間、僕、百目鬼航、十六歳・高校二年生は、シツチャかメツチャかの異世界の救世主にされてしまったのだった。

2・まじですか？

「航^{わたる}、何が有ったの？ さっき、帰ってきてから様子が変」

僕は両親と夕食を取りながら、今日出くわした血まみれで鎧を着たオッド・アイのオッサンの事やら、適合しちゃったらしい変な玉と見えつぱなしの変な小窓と言うか、画面というかについて、馬鹿正直に話した。普通の家庭なら、色々言いよんだり、親に言えなかったりするんだろうか？

ちなみに今は夏休みの終盤で、陸上部の合宿も終わったし、友人に誘われて行っていた大手進学塾が行うセミナーも終わっちゃったし、宿題やら課題なんて一日で片付けたし、マラソンの走りこみ以外は、飯食って昼寝して音楽聞いて、マンガ読んで、PC弄って、ゲームして、ちょっと勉強する。そんなところだ。

両親はド田舎の小さな診療所をやっている。ここら辺は大都会に近い割に急峻な山地に囲まれた超過疎地なんで、最短距離のコンビニまで車の通れない道を走って二十キロ少々だったりする。僕の足なら、車より早い。ちなみに僕の母校はコンビニの向かい側だ。あ、逆か。コンビニが僕の高校の向かいなんだ。

「走り込みって言うが、あのコンビニの『夏のスイーツ・第三弾』が食いたかったんだろう？」

「あら、私はネットで注文したマンガを引き取りに行ったんだと思っただわ」

「あー、それも有るけどさ、走り込みも本当」

兄貴^{しげる}の滋^{たまき}も姉貴の環も大学生で、当然こんな過疎地だから、それぞれ学生寮に入っている。親に言わせると下宿より費用的に随分楽

なんだそうだ。二人とも大都会の華やかな私学に行きたがったけれど、仕送りの金も続かないし交際費も大変、なんて両親に押し切られて、それぞれ全然違う地方の国立大学に入った。お盆時に兄貴も姉貴も三日前後家に泊まったが、すぐ、自分の通う大学のある街にめいめい勝手に戻ってしまった。

そんなわけで、僕は普段はほとんど一人っ子状態だ。

高校生だから両親が共稼ぎなんだが、鍵っ子って言う昭和の香り漂う言葉もそぐわない。大体両親は午前は診療所で目いっぱい働くと、午後は介護用の機材を積み込んだミニバンに乗って、田舎道を走り回って訪問介護だの往診だの、大忙しだ。何しろ急患となれば年中無休・二十四時間即対応だし、良くやっているとと思う。医者が儲かるなんて、僕の両親にはまるで当てはまらない。忙しい割には全然儲かってないのは、僕じゃなかったってはつきり分かる。

それにしたって、僕が異常事態について正直に語ったのに、父さんも母さんもリアクションが変だろう。

「ね。僕がさ、超常現象だか怪奇現象だかに遭遇して、今も視界が変なのに、その反応は無いだろう」

「そうねえ、人知を超えた存在って、確かに存在するわよね」

母さんの温度の低いリアクションに、父さんがうんうん頷く。

「ウチの一族は、そもそもが異界から逃れて住みついた異形の存在の末裔らしいからな」

「別に、異世界って言っても珍しくも無いんじゃないかと言う気もするし」

「眼の中に何か普通じゃないものが見えるって、ウチの一族に限っ

て言えば……当たり前で」

「そうそう、父さんも私も、視界に小窓は開いてるから」

「滋も環も、小窓が開いたのって高校生の時だったか？」

「そうね。細かな経緯は私も聞いてないけれど」

ええええ！

「そうだぞ、航、知らぬはお前ばかりなり、って事だったのさ」

「じゃあさ、その、おっさんが僕に頼むって言った『フェドン』ってなんだよ？」

「どこかの異世界の名前だろうよ」

「航にそこで働いて欲しいんでしょう」

母さん、そこ、呑気に冷たい麦茶飲みながら言う事じゃないって。

「大学の受験も有るから、まあ、両立可能な範囲で目一杯頑張れよとぐらいしか、父親としては言えないな」

「それでも期待された役割は、頑張っただけじゃないけどねえ」

「でも、航が過労で寝込んで困るなあ」

「マンガとネットゲに使っていた分を割り当てたら、十分活動時間は有るんじゃない？」

僕の数少ない楽しみを取り上げるなんて、鬼か！　って、そう言えば鬼の末裔なんか？　僕ら。

「体だけ出席とか、代返とか替え玉とか、父さんも異世界との往復でやりくり出来ん時はやったぞ」

えええ？

今、父さんもやったとか言わなかったか？

「航が取り込んだ能力って、どんなのかしらね」

「まあ、今晚寝ればわかるだろうさ」

「そうね」

まじで、父さん、母さん……驚いたな……

3・御先祖様？

「そうそう、百目鬼家由来何とかって言う巻物が、土蔵のどっかに有るよ。戦前は門外不出とかなんとか言ってたけど、今はそんな事は無い。江戸時代の古文書を読むのが趣味の友達に言わせると『幕末期の妖怪ブームと系図ブームのコラボ』と言う事になるらしい。原文は毛筆の旧仮名遣いだけど、祖父ちゃんが現代仮名遣いでなんか訳文を書いてくれてたはずだ」

父さんの幼馴染で、どこかの大学で江戸時代の古文書を研究しているおじさんと言うか教授に、百目鬼家の先祖はマジで異世界からやってきた異形の者だって打ち明けたのに、まともには受け止めてもらえなかったと言う事らしい。どうやら祖父ちゃんも、似たような挫折体験をしているらしい。

「文章がチンプンカンプンでも、絵図面だか肖像だか知らないけど、御先祖様の姿を描いた絵だけでも、一見の価値ありかもね。結婚して見せてもらって、なるほどって私納得しちゃったもの」

母さんは父さんと従兄妹同士だから、共通の御先祖なのだ。納得したって、何で？

そんなこんなで、他に特段の予定も無いんで、夕飯の後、また、急患を診に出て行った両親を見送ると、こうして土蔵でその巻物を探している訳で……お？　これか？

長さ五十センチほどの細長い木箱が見つかった。『百目鬼家由来詳説』という張り紙が蓋にしてある。中には巻物と、祖父ちゃんの筆跡らしい『本文口語訳』と表記した丸めた大学ノートが入ってい

た。

「何じゃこりゃあ!」

巻物はいきなりスライムに目玉が幾つもくつついたみたいな妖怪だか化け物だかの、絵で始まっていた。

「なになに、百目鬼図」

その後は、延々毛筆の文章が続く。祖父ちゃんの残したノートを見ないと、何が何やら僕にはさっぱりだった。大体、僕って理系志望だし、古文ってあんまり得意じゃないんだ。こんなの難易度? 過ぎ。

「我が一族の始祖とも言うべき百目鬼は、異世界の生き物であったようだ。百目鬼と言う名前自体、後世の者が勝手に名付けたに過ぎず、本来の名は伝わっていない。ともかくも先祖を同じくする家々の口伝・秘伝を総合してみると、このような姿であったものではないかと思われる。通常の鬼とは違い、定まった姿形と言うものを持たないのと言う。何であれ、雛形となる生き物の姿形を正確に写し取り、その生き物になり切る力が百目鬼には有ったらしい……」

あー、祖父ちゃんの口語訳も結構面倒。

つまり、どっかの異世界から目玉みたいなものがどっさりくつついた巨大スライムみたいな生き物が、この辺にやってきた。そのスライムは人間の姿形と能力をコピーして、人間としてこのド田舎に暮らし始めたって事らしい。口語訳そのままじゃ色々説明不足で、祖父ちゃんが思い付きやら、調べた事やらを色々メモしている。そっちの方が面白い。

「初代は自己の体を二分割して、男女の形を取り、人間の夫婦を装って暮らしたのか？」

「異世界では単性生殖、自己増殖の形で個体数を増やしていたと見るべき」

「ほぼ全部の生き物の能力をコピーできると思われる」

「人類の形態を取ってずっと暮らしてきた個体は、簡単には先祖返り出来ないらしい」

「一旦先祖返りした者が、再び人型に戻る事は比較的容易らしい」

本編の方は、幕末期までの歴代のこの地の百目鬼さんが、どんな特殊能力を持っていたか、誰と結婚して、何人子供が出来て、どんな業績を残したか、わかる限り調べたって感じ。

自分のヘンテコな先祖について、科学的に実証的に調べようとした祖父ちゃんのそのまた祖父ちゃんの祖父ちゃんが、若いころに熱心に調査した結果をまとめた報告書みたいな内容らしい。その筆者である御先祖だけど、百目鬼修斎って言う人らしい。当時と言う蘭癖、つまり蘭学マニアだったようだ。そのころの百目鬼家は養蚕で結構儲けていて、趣味に走る経済的な余裕も有ったらしい。明治期になってすぐ子供達に近代的な高等教育を受けさせる事が出来たのも、養蚕のおかげみたいだ。確かに、ウチの周りは今でも桑の木が多い。

祖父ちゃんのメモを見る限り、一番古い記録は平安期の終わりごろにどっかの侍大将に討ち取られた「百個の目が有る化け物」に関する物みたいだ。化け物二体を大将が討ち取った後、愛らしい男女の双子の赤子が見つかり、その子供らを侍大将は自分の所に引き取り養育したと言う。男の子は優れた武者となり実子が居なかった大将の家を継いだ。女は都から来た身分高い人に見染められて奥方になったとか言うんだが……

「死んだわけではなく、愛らしい乳児の形になって、その侍大将の家の養い子になった可能性が高い」

「人間の心理を読み、最も好まれる姿形・行動を取ったのではないか？」

「一族で血族婚が多いのは、先祖が保有していた異能を失わないための自己防衛」

祖父ちゃんのメモの通りなら、僕らはスライム型のエイリアンの末裔と言う事になる。

4・意識球体？

そのうち両親も往診から無事に戻ってきて、僕は一応お休みを言
って、眠る事にした。巻物は僕が自分の部屋に置いていて構わない
そうだ。父さんも母さんも今夜の夢で何か重要事項を僕が知る事
になるだろうって言う。そうなのかな？ やっぱ緊張する。だが、
父さんも母さんも全然心配はしていないらしい。

「夢で色々有るかもしれないけれど、まあ、頑張れ」

「明日の朝、どうだったか、また教えてね」

実にのどかで平和な調子でこう言われたので、ちよつと気分が楽
になった。

昼間に十分走りこんだ所為もあるのだろう。いつも通り眠くなっ
て、意識が途切れた。と思ったんだが……こんな言葉が意識に飛び
込んできた。それでも僕は眠っているらしい。

（はじめまして、ワタル・ドームキ、私はファキ。正確にはファキ・
ンティバントウंगाニャ……）

（わわわ、すみません、日本人にはなじみのない音が多くて、お名
前が上手く認識できません）

（わかった。ファキ・ネットで良い。この位なら大丈夫か？）

（はいはい。すみません）

（私は君の先祖カソマ・ニトと元々は同一の個体だった。リスクを
避けるため、二つに分かれた。故郷の星から逃げ出した直後の事だ
ったので、二つ以上の分割を行うエネルギーが無かった）

オリジナルなスライム形態を保持していると、二分割以上はエネ

ルギーが不足していると難しいが、別の知的生命体の群れというか集団というかに同化すると、その群れの数に応じて多数に分割できるそうだ。

（カソマ・ニトは地球人に同化して増殖する方法を選択した。カソマはカソマとしての意識・存在としての枠を捨てる事にためらいが無かった。枠を捨てたからこそ、地球人に同化して暮らし増殖する道が開けたのだ）

（なぜ、地球の人類になる事をカソマさんは選んだのですか？）

（ある程度の知的能力を有する生物の中で、地球人類が一番力強い進化と早い進歩が見込めた。カソマは孤独に飽きていたのだろう。知的生命体同士のふれあいで交わされる様々な思念などの、微妙な波動に魅力を感じたようだ）

ファキさんとカソマさんはそれまで、宇宙を放浪しながら色々な電磁波やら光線やらを吸い込んで、エネルギーとしていたらしい。だが、そういう単調な波長ばかりだとつまらないとカソマさんは感じてしまったらしいのだ。カソマさんは孤独なスライムでいるのに疲れていたらしい。

（私は、カソマとは違い、元の形を完全に失うかもしれない選択をする気にはなれなかった。だから本来の肉体の大半を極寒の惑星に安置し、冷凍睡眠状態に置いて保存している。一方で生体エネルギーを分裂させて小型の意識球体を産みだし、幾つかの星の知的な生命体に同化させた。おかげで多彩な波動の恩恵を受けながらも、ファキとしての自我を保っている）

意識球体とは、ファキさんでも一度に一個しか産み出せない貴重な存在らしい。これまで生み出した意識球体は十個だけなんだそう。

（その内一個がワタルの中に入りこんだ物だ。もともとは地球人類と類似の生命体が発生した衛星に、私が投下したものだ。その知的生命体の社会が順調に発展し、多彩で豊かな精神波動が発生するよう期待したのだ）

ファキさんによれば、大宇宙には幾つかの人类的な知的生命体の居住する惑星が存在するとの事だ。だが地球の人類が一番個体数が多く、活気が有るらしい。

（そこで、地球に類似した自然条件で、高度な知的生命体が発生していない惑星を三十個ほど選び出し、それぞれの星の未熟な生命体に刺激を与えた。地球人類をモデルにして創造した生命体を産み出し、その社会が発展するように調整した。高度な精神的エネルギーは、私の意識体のさらなる発展成長に必要なからだ）

人類や人類をコピーして発展させた生命体の精神的波動を味わう内、どうやらファキさん自身が大いに变化したらしい。以前は電波なんかを吸い込むスライムだったのに、人の細やかな感情のやり取りに興味を覚えるようになったようだ。そしてカソマさんの選択にも、以前より共感を覚えるようになったらしい。

（意識体とか意識球体って、つまりは何です？）

（地球人の言う精神とか霊とかに近い存在かな）

ここまで画像無しの音声だけのやり取りだ。

（ファキさんも、あの百目鬼図みたいな姿？）

（元々の肉体は確かにあの形だが、宇宙全体で人型の知的生命体が増えて来たので、この一万年ほどは受けを狙って、意識体はこの形

状だ)

急に、眩しい光が辺りを覆った。

おおっ、まるで大天使みたいな格好だ。何せ真っ白い大きな一對の翼を持つ美形なのだから。

(やはり、気に入って貰えたようだな。そうそう、任務を遂行するにあたり、ワタルはどんな形態を選ぶ？ スライムにも戻れるし、他のどんな形にもなれるのだが)

それにしても、任務追行は確定なのかな？

スライムに戻るメリットってのも有るのか？

色々わからないことだらけだ。

5・コッパって、何？

ファキさんが言うには、僕の人型を一旦リセットすると、細胞の分割も出来るし、ファキさんほど沢山は作れないけれど、意識球体も作り出せるようになって、別世界での活動も多彩に強力に展開出来るようになるらしい。

（僕をオリジナルタイプの体に、一旦変換するんですか？）

（君の両親は経験済みだから、その話を聞いてから決めるかい？）

（そうします）

（じゃあ、今夜はこの辺で）

（ちよっと、ちよっと待って）

（なんだい？）

（あの、血まみれで倒れていていつの間にやら消滅しちゃったオツドアイのオジサンは、どこの誰で、どうなっちゃたんですか？）

（あれは異世界フェドンの皇帝だ。君が見た姿は彼の自我や意識が保たれていた段階での、最後の姿だ。君に意識球体を渡したので、つい先ほどすべての生命活動を停止した。あの意識球体はかなり異色だ。元来地球のローマ帝国で戦死しかけた優秀な人材に、カソマが一瞬で意識球体を融合させたものだ。その融合体は偉大な皇帝として歴史に名を遺した。優れた融合体が人類としての存在を消滅すると、パワーアップした意識球体が残る。カソマがそのまま取り込めば、カソマ自身の力も増したはずだ。だが、カソマは私にあの意識球体を委ねた。私が始めた幾つかの惑星での知的生命体の育成に役立てろ、と言う事だった）

通常の意識球体は本体であるスライムの意志や感情は理解しないが、僕が取り込んだ意識球体はカソマが優れた人物の死に瀕して緊急措置的に作り出した所為なのか、普通より意識球体自体が「地球

人臭い」らしい。

（オッサンは、だまし討ちに遭ったと感じたんですが、違うんですか？）

（そうだ。フェドンは今、大いに乱れている。賢帝とされた彼が、精神汚染を受けた部下にだまし討ちにされたのだ）

（精神汚染ですか？）

リアルでは某国の某政党ぐらいしか使わない『精神汚染』って言葉は、部外者には「どーだっていいじゃん」と思わせるには十分な鬱陶しさを覚える。

（フェドンは今、育成した私の影響を排除して、精神エネルギーを変質して取り込もうとする巨大生命体に取りつかれている）

（巨大生命体って、宇宙大怪獣？ どんな格好なんです？）

（暗黒を感じさせる、何もかも吸着しようとする……）

早い話、何万と言う触手をうねうねさせている真っ黒けの毛玉から一本だけの短い棒状の足だか何だかを突き出した形の生き物らしい。黒い毛玉に短い串を突き立てたみたいな形？ ボール状のキャンデーに棒を付けた商品に似てなくもないが、もっと棒が短くて、ボール状の部分が真っ黒でデロデロ動く感じ？ つまりそんな恰好なのだ。

（あの形から、仮にコッパと名付けた）

（木端微塵にしてやれ、てなもんですか？）

（いや……ギリシャ文字だ）

（ハハハ、そうですか）

アルファ、ベーター、ガンマ、デルタ……ああ、そうなんか。コ

ツパは使われなくなっちゃった文字ね。

（覚えにくかったかな？）

（木端微塵のコツパだと思えば、OKです。ともかくも、コツパの所為で、好戦的で排他的なおかしな一神教の大集団がフェドンの人間の中に発生して、人間は無論、他の知的生命体にまで非常に悪影響を及ぼしてるんですね？）

（ああ。イカレター神教を妄信している状態の生命体の精神波動が、コツパにはたまらない美味らしい）

（騙し討ちに遭った賢帝だったオツサンは、それをどうにかしようとしたんですね？）

（ああ。コツパとフェドンを無理に結び付けている『パイプのようなもの』を断ち切ろうとして、それを察知したコツパの崇拝者に暗殺された）

コツパの崇拝者は『秘跡教会』の信者なんだそうな。コツパの糸のような触手に触れて文字通り精神が汚染されてしまう状態になる事を、連中は『神の秘跡』を受けたなどと、信じているらしい。汚染されると極端に好戦的になり、『異教徒』に対して極度に排他的になるらしい。世界中魔女裁判？ フェドンという世界はそんな状態みたいなのだ。そりゃあ、大変だ……

6・普通に朝飯が美味いけど

（君の御両親は、のどかな小惑星で少し働いただけだが、それでも一度はスライム状態に戻って、異世界に適合した別の肉体を手に入れた）

（両親の異世界での別の肉体は今、どうなっていますか？）

（それぞれの惑星で、癒しを与える巨大な樹になって存在している）

そこで夜明けが迫って来たみたいだ。僕も両親の話を聞いてから、決心を固めようと思ったのだから、ちょうど良いタイミングだったのだらう。ファキさんとは、また夜に再会になるみたいだ。

朝ごはんの風景はいつもと同じ。炊き立てのご飯に、美味しい味噌汁。

今朝の具は茄子と茗荷だ。それに先祖伝来の糠床に浸かっていたキュウリとカブは最高だ。地元の鮎の風干しは、患者さんのお宅からのもらい物だが、これも激ウマだ。

「鮎の風干しは酒の肴に最高だが、飲酒運転も出来んから、つい朝ごはんになってしまふな」

父さんはちよつと残念そうだが、おかげで僕もお相伴にあずかる。

あとはカボチャの煮物に、冬瓜のあんかけ、オクラの胡麻醤油、青菜の辛子和え、甘さ控えめのフンワリ卵焼き、パリっとした焼き海苔、忘れちゃいけない納豆……

「うちの朝ごはんて、何気に贅沢だよな」

「そうよ。最高の素材を使って、愛情込めて作るからねえ」

僕は両親の話を聞いて、ファキさんの申し入れを受けることにした。だがなあ……スライムなんかになっちゃったら、美味しい飯とも当分お別れなんだろうなあ。

「スライムになっても、ご飯は普通に食べられるわよ」

「そうなの？」

母さんの言葉に僕はちよつと驚いた。父さんも身に覚えが有るのかして、頷いている。僕の場合は両親に理解があつて、恵まれているのかも知れない。

「確かに、普通の家なら子供がスライムになっちゃったらパニック状態よね」

「自分が寢床の中で一匹の巨大なスライムに変わっているのを発見した。なんてな。考えてみれば、カフカの『変身』より凄いか」

父さんの言つた小説は高校の国語の授業でやつたんで、一応全文読んでる。

「でもさ、食べ物好みが変わっちゃわないの？ あの『変身』の主人公は腐りかけた野菜やチーズを食いたがるようになるんだっけ」「私達は全然事情が違うのよ。カフカのあの小説の主人公は本当に虫になっちゃうけれど、スライムの方はちゃんとお箸もナイフフォークも使えるのよ。あー、女の子的には全裸って言うのが照れるけどね」

母さんは全裸が気になって、シーツを被ってたんだって。父さんは「男は潔くすっぱんぼん」だったらしいが。それにしたって、父

さんも母さんの場合も、祖父ちゃん祖母ちゃんが騒がず普通に受け止めてくれたわけで、つまり『我が一族では当たり前』な事なんだと言っ安心感は、実に有り難い。

「じゃあ、話の流れだと、明日から航はスライムかしら？」

「高校の授業が始まるときには、どうにか恰好がつくと良いね」

父さんも母さんも、ファキさんの名前や直接の先祖であるカソマさんの事も教えて貰えなかったそうだ。

「航って、きつと規格外に能力が高いんだと思うな」

「あれじゃないの、航って彼女がいないから、それも関係あるんじゃない？」

「ああ、そうだな。そうか」

「私達も、滋も環も付き合っている相手、高校に入るときにはいたものね」

「そうだな、それ重要ポイントかもしれない」

父さんと母さんは勝手に納得している。僕に彼女がいない事と一体の何の関係がって思っ、ちょっとばかり拗ねたんだが、本当に関係が有ったみたいだ。

その夜、また僕は眠って、夢でファキさんとの二回目のコンタクトを取った。

（一切の生殖行動を行う前で、その肉体の八割が完成している時期でないと、ああいう力の強い意識球体を取り込むのは無理なんだ。君の両親と兄さん姉さんは、その規定に当てはまる時期が非常に短かったし、たまたまその時点では普通の意識球体しか無かったし。それに対して航は付き合っている相手もいない。当分現れそうにな

いから、私も安心だ)

ええ？ 当分彼女は現れそうにないって、それ、結構凹みますが……

(一般的な友情なり親愛の感情を持つことは無論可能だ。だが、生殖行動を行う特別な相手に出会うには、まだ時間が必要だと思われる、そういう事だ)

何か、結局おんなじことじゃないのか？

(君の両親や兄弟は人類以外の動物とは深い信頼関係は築きにくい状態だったが、航は大丈夫。どこの惑星のどんなタイプの動物とも馴染める)

人外ですか。まあ、いいや。友達になれるなら。

ともかくも、この日本の高校生としての社会活動に支障をきたさないように、まずはファキさんの全面協力の確約を取りつけてから、僕はいいよスライム化する事にした。

7・初のスライム体験

「何か、デローツと締りの無い感じ」

スライムになった最初は、そんな感覚だった。形が決まってないって、やっぱりだらし無い感じがする。

「ご飯を食べるのに、不自由は無いかしら？ 見た感じでは大丈夫そうだけど」

「うん。箸や茶碗を持とうとすると、触手が勝手に出来て、ちゃんとかうやってつかめるんだよ」

「口がどうなっちゃうのか、わけわかんないよね。超ミニサイズのブラックホールみたいに、急に食べ物が消滅する感じに見えるよ」

父さんに言われるまで考えてなかったが、口がどうなっちゃってるのは謎だな。

「航ってスライムになっても、可愛いのね」

「そうかなあ。メタリックでカッコ良いと思うけどな」

母さんと父さんとで多少の見解の相違は有るけれど、スライミーな僕は、両親にはおおむね好評だ。

朝と晩は両親と一緒に食事するから問題無いが、昼食がちょっと困った。スライム型じゃあ、自分で買い出しは出来ない。自炊なら出来ない事も無いけれど、このデロデロした体は随分かさばる。これまで何の苦も無く作業出来た台所で、あまり上手く動けない。

結局冷蔵庫にすぐ食べられる物を入れておいて貰って、それでしるぐ事にする。

僕らの一族は人型を保つために、普段無意識に多大なエネルギーを使っているらしい。

こんな風にスライム型で、でろーんと過ごしていると、その浮いたエネルギー分を有効に意識球体を新しく作り出すのに振り向ける事が出来る。ファキさんから、そんな説明を受けている。

夕食を食べたら、すぐ寝る。スライム状態になってから、マンガやゲームに対する欲求が大幅に減った。その代り、食欲と睡眠欲だけが昂進したみたい。そういう訳で、スライムになった初日は、夕食後すぐに就寝消灯となった。

すると、すぐにファキさんの夢の中でのレクチャーが始まる。

フェドンの人類の精神を変質させ汚染している、コツパと名付けられた巨大な生命体の勢いを削ぐなり、出て行ってもらうなりするために、僕も相当頑張らなきゃいけないみたいだ。

（コツパを完全に抹殺するのは、難しいですか？）

（私も元来がスライム型だからわかるのだが、ああした不定形の巨大なエネルギーを吸い込んだ生命体は、ホンのかけらからでも自己を簡単に再生出来てしまう。コツパは、私やカソマのように精神活動をを行う主体に魅力を感じると言う発達レベルでは無くて、ひたすら自己の食欲に忠実なだけなんだ。美味しいものが得られないとなれば、自然にフェドンを離れるだろう）

早い所どころかしないと、フェドンで味を占めたコツパが、精神エネルギーの総量が宇宙の中でも一際多い地球にやってくるのは目に見えている……らしい。次の行先が地球じゃ、困ってしまうような。

（コツパは、食べてもまずいと執着しないんですね？　つまり、イカレター神教の信者がゼロに近い状態になれば、コツパにすれば不味い精神波動ばかりになって、フェドンを離れる可能性が極めて高くなるって事ですか？）

（そうだ。その通り。奴が不味いと感じる精神波動の条件を正確に探り当てる事が出来れば、地球の災難も未然に防げる事になる）

好戦的で排他的な状態での精神波動が好物だつて言うなら、その逆の状態の精神状態なら良いんだろうか？

（自由と平和を愛し、異なる価値観も柔軟に理解する、そんな人間が大半を占めれば良いんですね）

（確かに、それが確実に出来るならば、最高の方法だろうな）

（どうやるんですか？　何か良い方法、有りますか？）

（私も良い方法は分らない。君が良いと思う事は、何でもドンドン試してくれ。フェドンの人類以外の生き物たちの協力が有れば、何かと好都合だろう）

こんな具合に毎晩ファキさんと僕は話し合っていたが、たちまち日数が過ぎて夏休みも終盤に入った。

僕自身の意識球体が、どうにか出来上がった。新しい意識球体は、僕の地球人としての全能力の他に、僕が取り込んだ意識球体の持っていた記憶や能力も受け継ぐそうだ。

（フェドンの人類は、残念ながら多かれ少なかれあのコツパに毒されている。君の意識球体を人類として適合させるために融合できる者が居ないと言う事なのだが……そうだ。私のこの意識体の一部を融合させよう）

その瞬間パツと見では、出来立ての銀色に光るちつちやな珠に、天使の姿のファキさんが自分の指を切って、血を垂らしたかのように見えた。

（今から君の意識を最初は全部、この新しい意識球体に移す。うまく適合出来たら、フェドンと地球、双方の肉体を適切に使い分ける事が可能になる）

（高校の授業が始まる時期までに、地球側の肉体が上手く動くようになりますか？）

（今のペースでいけば、ぎりぎりだが間に合うはずだ。では、意識の移動を開始する）

お？　おお？　何がどうなったんだ？

8・銀のしずく、銀の妖精

いきなり気が付くと、でっかい樹の上だった。何か特定の生き物になったと言っ感じじゃないなあ。地球にいる僕は現在、銀色のスライムの状態だが、その一部分、一滴と言っ感じた。

僕は丸三日、その木の上からフェドンについての情報を収集した。銀色のスライムからミストを飛ばし、それをまた取り込むのだ。これは僕なりの独自の工夫だ。オリジナルのスライムは糸状の物を巡らせたり、細い突起物をつっ込んだりして生物・非生物を問わず探りを入れる能力と、バラバラになった自分の細胞を再び集める能力が備わっている。

（スライム状態なら飲まず食わずで、こんな風にミストを飛ばして、どのくらい持つかな？）

（その小さな滴状態なら地球の時間で一万年かそこらは、飲まず食わずでも軽いだろう。ミストを飛ばす活動自体が一種の捕食行動ともなりうるから、飲まず食わずと言っ事にはならないはずだよ）

ファキさんの意識とはすぐに繋がるので、相談もすぐできる。どうやら、たとえミスト状態でも、それを回収する際にエネルギー変換しうる波動を帯びたりしたら、捕食って事になるらしい。

（なんか面白いな。人間以外の知的な生命体の波動が色々感じられるよ）

（私もフェドンの全部の生物を把握しているわけではないが、人間の描いたファンタジー小説に登場するような存在は、幾つか確認している）

妖精とかドラゴンとかワーウルフに該当する存在が、僕にも確認

できた。人間がおかしな宗教に染まりすぎて、まともな状態じゃないって言うなら、そういう種族の力を借りてフェドンの環境に同化するのも有りかも知れない。

（現在の自分に存在しない他の生物の能力をコピーするのも、一つの手だが、無理にコピーすると生体からの思わぬ反作用を受ける）

ファキさんが言うには、コピーしたい存在の認知なり了承なり得ないと、一種のアレルギーのような症状が起こり、スライムのコピー能力そのものも減退し、痒みとか痛みのような不快症状に悩まされたり、ひどい時は高熱を発して活動を停止する羽目になるそうだ。

（ちょっとした怪我なんかをした個体にとりついて、怪我を治すのを交換条件にして、能力をコピー出来ると一番効率が良いんだがね）
（妖精とか、ドラゴンとかにとりつけると、理想的ですね）
（傷ついた個体に上手い具合に遭遇できると良いねえ）

と、その時、子供の泣き声がした。と思ったら、子供じゃない。妖精なんだろう。フェアリーって感じだな。パツと見て十歳未満の女の子に蝶みたいな四枚羽をつけた感じだ。右脚が凄まじくはれ上がっていて、痛むらしい。

（あの子を治せるかな？）

（毒と異物を取り除き、組織を修復すれば良いわけだ。今の君なら簡単だろう。ファーストコンタクトは慎重に行うべきだが、まあ、嫌われないように頑張りたいまえ）

（嫌われないようにね。はい。頑張ります）

「痛ったーい……毒消しの薬草が有ると思ったのに、無いッ！どうして全然無いのよッ」

「僕、その足を治してあげられると思うよ」

「何？ あんた、初めて見るけど、水玉みたいね、まるで。キラキラして綺麗」

「その毒を取ってあげられるし、傷も塞いであげられるはずなんだけど、僕の言う事、信用できない？」

「いいわよ。信用してあげる。声がやさしいから」

「じゃあ、その足に触らせてね」

僕はうんと細い糸の触手を潜り込ませると、まずは明らかに異物だとわかる突起物を取り出した。ついで毒を吸着し、外に捨てる。それから、断裂した組織を全部修復した。

「うわあ、すごいね。ありがとう。もう全然痛まないし、右脚も元通りよ。お礼に祝福のキスをしてあげようと思ったけど、あんたってどこが顔なのか分からないわ」

「え？ 祝福のキス？」

「ええ。大地の妖精の祝福のキス。知らないの？」

「うん。何だか素敵な響きだけど……」

「祝福のキスを受けると、大地の妖精の仲間が、みんな、あんたを仲間として認めるようになるわ。中には偏屈な妖精もいるから、すぐに仲良くとはいかないかもしれないけれど、少なくともいじわるはされなくなるの」

「顔が有った方がよいね」

「そうね。出来れば綺麗な顔の方が、キスの力も強くなるけど、贅沢は言わないわ」

「じゃ、これでどう？」

僕はこの女の子にお似合いかなって思う、可愛い男の子を思い浮かべた。具体的には二十世紀始めのイギリスの妖精の絵のシリーズを意識した。半透明の四枚の羽を持った全身銀色のかなり可愛い男

の子に変化したはずなんだが……

「まあ！ 素敵、銀色に光って、とっても綺麗だわ！ じゃあね、こっちに来て」

チュツ！

額に音を立ててキスした。これってファーストキス？

ちよつと固まってしまった僕に対して、この子は、こんな事は慣れっこみたいで、クスツと笑われた。

「あんたの名前、何？ それとも、あたしには教えては貰えないの？」

「え？ 名前を教えるとか、教えないに、なんか、すごく意味がある？」

「あら、有るに決まってるでしょう。そんな事も知らないって、あんた、どこから来たの？」

「気が付くと、この樹の上にいた。誰かと話が出来なくなつて、三日の間ここで様子を見ていたんだ」

「ぼんやりと、この樹の上で三日も？」

「うーん、ぼんやりとではないけれど、三日いたのは本当」

「ふーん」

妖精の女の子？ 多分形状からすると女の子だと思うが、ともかくもこの子は、僕をぼんやりした変な所の有る奴だけど、それなりに信用は出来そうな奴、そんな風に認識したらしい。

9・初めての仲間

「へえええ、ワタルって言う名前なの？ 変わった名前ね。でも、綺麗な響きだわ」

この妖精ちゃんにとって、綺麗かそうじゃないかは重要な事らしい。

「君の名前は？」

「聞きたい？」

「なんて呼べばいいのか、わからないもの」

「本当の名前はね。リリアーナ・リリーって言うの。でもこれは秘密」

「じゃあ、秘密じゃない名前は、他に何か有る？」

「リリアって、みんなは呼ぶの」

「リリアは、どうしてあんなひどいけがをしたの？ 毒もかなり強いものだったね」

「狂い蜂にやられちゃったの」

リリアによれば狂い蜂なるおかしな蜂の出現は「つい最近」なのだそうだ。

「何がどうなったのかさっぱりわからないのだけど、あたしが子供のころの蜂はあたしたち妖精を刺すなんて、有り得なかったわ。乱暴な人間や巣を荒らす動物を刺すぐらいだったのに」

「狂い蜂が暴れだした頃って、人間にも何かおかしなことが有ったのかな？」

「あー、『秘跡教会』とかいうものを信じる人間がすごい勢いで増えたの。つい最近なんだけど、『秘跡教会』の所為で一番大きな国

が滅んだらしいわよ」

「大きな国って、何て名前？」

「パフォス帝国。国を治める皇帝が急に死んじゃって、そのすぐ後に秘跡教会の連中が攻めてきたらしいわ」

僕はいろいろ質問した。リリアは自分の知っている限りの事は話してくれたが、人間の事情はやはりよくわからない事が多いみたいだ。

「凶暴じゃない人間って言うか、『秘跡教会』を信じていない人間の住む場所って、無いのかな？」

「あー、最近すごく減っちゃったのよね。それでも、あの、あそこに見える山の麓の泉のほとりに、小さいけれど綺麗な村が有るわ。

他の人間たちからは身を隠すようにして暮らしているみたいなのよねー」

「そういう人たちなら、お近づきになっても悪くないな」

「ワタルは人間に興味が有るみたいね。なぜ？」

「この世界がおかしいのは、邪悪なものに心を支配される人間が増え続けているからなんだ」

「確かに、人間は妖精よりずっと数は多いわねえ。困った人間が増えるのは、本当に困るわ」

「邪悪な存在をこの世界から追い出すためにも、この世界の人間の事をもっと知りたい。邪悪なものに毒されてない人間と親しくなれたら、上手く行くと思うんだけどな」

僕の話聞いてリリアは方法を考えてくれた。

「あたしね、時々人間に化けて薬草や薬酒を売りに行くの。そのお金でちよつと買いい物をしたりするんだけど、一緒に行く？ あー、でも、変身できないかな？」

「銀色のしずくになら戻る事が出来るから、人間に化けた君の服に

目立たないようにくつついて行くとか、荷物に紛れ込むとか、無理かな？」

「それなら出来そうね！　じゃあ、まず、支度をするためにあたしの家に行きましょう」

リリアーナ・リリーの家はかなり大きな樹の大枝に空いた洞^{つら}といつか、そんな感じの穴を利用したものだった。ちなみに、僕が三日過ごした樹は、このフェドンで一番大きな樹であるらしい。リリアの後にくつついて入った家の中は清潔で、爽やかな樹液の香りに満ちている。

「それにしても、ワタルって羽を使うのは生まれて初めてだったの？」

「うん。気分、良いもんだね」

「変な子。でも、面白いわ」

「綺麗でいい匂いがする家だね」

「チョツと人間の作った食べ物を食べるには、向かないけどね」

リリアによれば、人間の作った素材を使った食べ物とこの家の匂いは相性が悪いそうだ。

「どんなに美味しいお菓子も、変な味に感じられちゃうの。だから、外で食べる事になっているのよ」

お菓子が好きなのか。やっぱり女の子だなーって僕は思ったのだつたが……

「あらあ、あたしはれっきとした大人よー」

「あ？　そうなの？」

「ワタルっていくつなの？」

「十六歳」

「えええ？ そんなに若いの？」

「じゃあ、リリアっていくつ？」

「ワタルより年上！」

どうも年齢の話は不味いらしい。

「さっ、この樹の根っこのところに行きましょう」

話を切り上げて、さっさと行こうと言う雰囲気だった。

根っこのところには、特製の薬草酒が有るんだそう。材料の提供はリリアがするけれど、醸造は地下に住んでいる「小人のおじさん」がしているらしい。

10・大樹の根っこ

「小人のおじさん、あたしの友達を連れて来たわ。一緒に人間のところに出掛けるんで、あたしの取り分をちよつとだけ出してくれない？ あ、これ、この前、欲しいって言っていた金色の苔よ」

小人のおじさん……と、リリアは呼ぶが、一体実年齢はどのくらいなんだろう？

確かに見た目はゴワゴワした灰色の髭を生やした灰色の髪 of 老人なんだが。白雪姫の話の小人がもつと偏屈になったみたいな感じだ。服もナイトキャップみたいな帽子も茶褐色で、一番上に黒い革製かなって思うポケットがいっぱいついた釣り用のチョッキと言うか、フィッシングベストみたいな物を着ている。ずっと背中を丸めて、気難しい表情のままだ。

「こいつ、どこのだいつだ」

「初めまして、ワタルと言います。地球と言う異世界からきました」

一瞬、小人の眉間のしわが緩んだ。

「お前もこのリリアと似たり寄つたりの年頃なのか？」

「地球の年で、僕は十六歳です。リリアの年は、僕は知りません」

すると、小人はちよつと意地悪そうな笑みを浮かべた。

「フォッ、フォッ、リリアは軽く千歳は越えとるよ。ワシの事を勝手におじさんと言うが、自分の方がズツと年上なんじゃ。ワシの家のひい祖父さんの、そのまたひい祖父さんのところからの付き合いらしいが、ワシはまだ百歳じゃよ」

「妖精は五千歳より若ければ若いって言うの！ おじさんの種族が短命なだけじゃない」

リリアは不機嫌になった。それにしただって、すごい長い生きなんだなあ、フェドンの妖精は……

「この金色の苔が酒になじんでからの方が、味も効き目もぐんと良くなるはずなんじゃが、今日、一部を取り出すのかね？ 瓶何本分入り用なんじゃ？」

「一本だけでいいわ。ワタルと一緒に人間の村に連れて行くのが目的だから。後は干した薬草でも売る事にするわ」

薬草を蜂蜜酒に付け込んだと言う酒を、一瓶受けとると、リリアはさっさと外に出た。

「小人のおじさんの所はカビ臭いし、蜘蛛やらモグラやらあたしの苦手な生き物がしょっちゅう居るから、やっぱり苦手。このお酒はすんごくおいしいんだけどね」

美味しいけれど強くて、たくさん飲むとフラフラになるそうだ。

「人間にはね、その泉の水でうんと薄めて売るのがよ。その方が人間にはちょうど良い濃さになるから」

ボン！

そんな音がして、いきなり、リリアが巨大化した。って言うより人間サイズになったんだ。

「へええ、人間になったんだね」

「格好と大きさだけね」

「人間になつてもすごい美人だ」

「あら、そう？　口が上手いのね、十六歳のおチビちゃんなのに」

そうは言うが、美人って言われると悪い気はしないみたいだ。表情がにこやかになった。

服装は、中世ヨーロッパの庶民の娘って感じの身なりになっている。どこからか、人間サイズの柄杓を取り出して、一抱えぐらいありそうな甕だか壺だかに、目の前の小さい綺麗な泉の水をくみ始める。確かにこの量じゃ、妖精サイズには辛いだろう。

水を所定の量入れると、さっきの小瓶、妖精サイズでは大瓶に入ったあの酒を振り入れた。

「エプロンのポケットなんかどう？　妖精の格好より、確かにしずくになった方がバレなくて良さそうね」

「じゃあ、その可愛いハンカチにくつついていて良いかな」

「ええ、いいわよ」

僕は一旦妖精の姿で真っ白いエプロンの胸ポケットの高さに飛び上がると、ポケットの中に入り、しずくの格好に戻った、そしてポケットからのぞいているレースのハンカチにくつついて、外を見る事が出来るようにした。

「ああ、ちょうどいい感じ」

「何かまずい事が有ったら、隠れるなり、何なりしなさいね。あの村も段々前より物騒になってきたから」

どうやら頭上運搬で酒の入った甕を運ぶみたいだ。乾燥した薬草の類は、背中に背負う籠に入れるらしい。結構重くてハードだと思うが、この辺の庶民の女性はこんな風に荷物を背負うのが当たり前

なのかな？

それにしたって……人間になったリリアの胸、すげえな。
デカイ。

歩くたびに揺れてるのがダイレクトに伝わってくる。

迂闊な事を言つと不味そうなんで、黙っているが、僕のすぐ後ろの席の高校の同級生ならきつと「萌え」るんだろうなって思った。出校日の時も力説してたもんな。

「やっぱり金髪碧眼巨乳ですっ！」って……

リリアはまさに、その、金髪碧眼の見た目は美少女で、そのう、豊かな胸だ。あの時、全女子にドン引きされていたけれど、彼の嗜好がそれなりに僕も理解できたって気がする。

11・レフカ村の騒乱

リリアに連れられて辿り着いたのは、レフカ村と言う小さな村だった。

それでも村の広場には近隣から色々なものを持ちこんできた連中が商売をしていて、それなりに賑わっている。幾つか屋台のようなものも出ているし、村で唯一であるらしい宿屋兼食堂も有る。

一応、店を出す場所は決まっているらしく、リリアも自分の持ち場で薬を漬け込んだ酒と薬草を売り始めた。いつも向かいの宿屋兼食堂から二脚の椅子と小さな台を借り、借り賃として薬草を少し渡すみたいだ。

そんなわけで、リリアは台に酒の入った甕を乗せ、椅子を置いて商売を始めた。すると、中年の農夫かと思われる男が二人、やって来た。どうやらなじみ客らしい。

「おう、薬売りのねえちゃん、待ってたぜ。その酒、俺とこいつに一杯づつくれや」

「二杯で十レプね」

ざっと見まわした感じでは十レプが二百円程度に思われた。

カステラみたいな見かけの菓子が一個八レプ、肉の串焼きは十二レプ、ビールは十五レプ、パンが十レプから二十レプ程度。一泊朝晩二食付きの標準的な宿賃は八百レプ、反物が四百レプから千レプ程度って具合だからだ。

「ねえちゃん、前は二杯で八レプだったのに値上がりしてねえ？」

「ごめんね。一杯あたり一レプ値上げしたの。材料が不足気味なの

よ」

「ふーん。戦の所為か？」

「それは大きいわね。前は良い薬草が生えていた場所も、随分荒らされたもんだから」

「俺たち村から狩り出されて、一月近く道普請をやらされたんだけど、給金は無し」

「そうそう。偉大なる神のために」御奉仕申し上げろってさ」

「タダ働きで、腰は痛いし、肩も痛いし」

「収穫は遅れるし、踏んだり蹴ったりだよ」

「皇帝陛下が御存命のころは、こんなバカな事、なかったのにな」
「そうそう。何であんな奴らが威張りくさっているんだか」

呑気で陽気な市場に、明らかにそぐわない黒っぽい服装の物々しい一団が突然村に入ってきた。

中心人物らしき男は真っ黒いローブに黒いつば広帽子、首から金色の身分証かメダルのようなものを下げている。回りをラメラ・アーマーって言うのか？ 金属片を繋ぎ合わせた胴鎧って感じのものを着用して、ナチスドイツ軍のヘルメットっぽい簡素なデザインの黒い兜を被り、剣や槍で武装した兵士たちが五十人程で囲んでいる。

陽気で華やかな色合いの中に、突如踏み込んできた真っ黒けの物々しい一団の放つ違和感は強烈だった。

「シーっ」

「どうした？」

「あれ、見ろや。あいつ、異端尋問官だぜ。ヤベえな」

「うーん、確かに。姉ちゃん、あんたも用心しなよ」

巻物を広げて、皆に掲げて示しながら、黒づくめのローブを着た

オッサンは演説を開始した。客の二人の言うように異端審問官であるらしい。だって本人がそう宣言したんだから、たぶん本当なんだろう。

「良いか！ 悪魔と契約し、空を飛び、怪しげな予言をし、艶めかしい容姿で男を誘惑したり、いかがわしい薬を扱ったりいる者は魔女である」

「ですが、お役人様、このあたりは大昔から空を飛ぶ妖精や、予言する小人もいます。そうした人間では無い者たちはどう考えれば宜しいのでしょうか？」

村の長老株のお爺さんが、迷惑そうに顔を顰めて質問した。

「それらは汚らしい魔物だ。見つけ次第、火あぶりにかける」

すると、ざわざわ話し声が一齐に起こる。

「そんなの無理です。人間じゃ捕まえられません」

当然そういう声も出てくる。

「おのれ、下賤な者が審問官に逆らうのか、ええい、こやつらを引っ立てろ」

「そんな、無茶だ、みんな本当の事を言っただけじゃないか！」

まだ子供であるらしい若い声が、そういうと、幾つかの声が呼応する。

「そうだ！ ウチの村は昔から妖精や小人に助けてもらって、やってきたんだ！」

「皇帝陛下を騙し討ちにした卑怯者の同類のくせに、偉そうな事言いやがって」

縁台の上の異端審問官は、激怒した。

「ええい！ 異教の魔物や異教徒の亡き皇帝などを信奉する、とんでもない反逆者どもめ、村ごと焼打ちにしてくれる」

何だか、とんでもない所に来合わせたみたいだ。

12・初の戦闘？

意識をスイッチして、ファキさんに話しかけて相談する。下手に自分だけで考え込むより、絶対その方が賢いだろう。

（あの審問官の糞オヤジさえどうにか出来れば、この場は凌げるんじゃないかって思うけれど）

（そうだな。神経組織を切断するか？）

ファキさんも、僕と同じように考えたみたいだ。だが、接近の仕方が問題じゃないか？

（どうやって……あ、妖精モードで近づいてから、耳の穴とか鼻の穴とかから潜り込んでいますか）

（私が考えた事と同じだな。やれると思うよ。どれ、砂埃を立てて、奴らの目をしばらく晦ますから、その間に潜り込みたまえ）

（ナイスな援護ですね。よろしくお願いします）

（ただ、くれぐれも、奴の細胞組織を取り込まないようにね。汚染度が激しそうだ。目的を遂げたら、すぐ脱出した方がよいよ）

（了解です。じゃあ、行きます！）

ゴッオーツ

無風状態の中、いきなりすごい砂埃が舞って、異端審問官は喚いた。

「あ、悪魔の所為だ、気をつける」

僕はリリアのエプロンの胸ポケットから妖精の形で飛び出し、審

問官の顔に迫り、耳の穴に狙いを定めて飛び込んだ。なんか臭い。だが我慢して針状の突起物を可能なだけ伸ばし、奥の方へぶっ刺した。

ズドオオオン

肥満したオッサンの体が倒れたと見ると、僕は太急ぎでしずく型のままで飛びだした。着地すると、地面を転がり泉に飛び込んで、臭いにおいと血を洗い流した。

いきなり指揮官が倒れちゃったもんだから、兵士たちは大慌てで村を引き上げた。

「ワタル？ どこ？」

人間型のままのリリアが捜しに来た。僕が泉の縁の草の影から声をかけると、すぐ気が付いてくれたが。

「あんた、何やったの？ 何か凄い顔で、あいつ、倒れちゃったけれど」

「体から長い棘を出して、あいつの耳の中から柔らかさそうな所を狙って、思い切り刺したんだ」

「へええ！ すごい事、考えるのね。何人か怪我人が出ちゃったんだけど、あんた、治してあげられる？」

「やってみるよ。この人は僕らを捕まえようなんてしないよね」

「たぶん大丈夫だと思うの。あたしの事も、薄々人間じゃないって知っていて、相手をしてくれてるから」

一応用心して、リリアは人間の姿のままでいて、僕は『何でも治す不思議な銀の玉』って事にしておく。まあ、これだって異端審問官への密告の対象には十分なりうるけれど……

「この村の人間には、密告して褒美の金を貰おうなんて、さもない奴はいないさ」

そういう宿屋の主人の言葉は、僕は話半分程度にしか信用できなかった。だが、この場において、リリアに治療を頼む村人たちには、確かに邪悪な波動は感じられない。

訳ありげなよそ者の、個人的な事情は詮索しない。それがこの村の人たちの良識つてももらしい。リリアが普通の人間じゃないとは感じているようだが、それを殊更に問題にはしていないようだった。

「魔女だろうが、妖精だろうが、親切にしてくれる綺麗なお姉さんとは、仲良しでいたいもんさ」

手当をしてあげたおじさんの言い分は、わからなくもない様な気がした。

この世界では、妖精でも魔法使いでなくても、身元を詮索されたくない者は珍しくは無いらしい。ひどい領主や役人に虐げられたり、重すぎる年貢をのがれたり、って言う事情で生まれ故郷を捨てる農民はかなりの数にのぼるようだ。

「別にやりたくてやった訳じゃなくて、それでも人を傷つけたり、食い物を盗んだりって事も有り得るじゃないか。こつちも話を聞いてしまうと、役人に聞かれたら教えざるを得なかったりするけれど、聞いて居なかったら、知らない、わからないですむじゃないか。だから、言いたく無い事はだまってるやいい」

以前なら近隣の諸侯の領地から、皇帝直轄領のこのあたりを目指すものは多かったそうだ。それだけ皇帝直轄領は年貢が軽く、性質の悪い役人も少なかったという事らしい。

それが皇帝の急死後、秘跡教会の直轄領に編入されてしまったから、事情が一変したという。

「うちの村みたいな穀類の取れ高の少ない土地の場合、皇帝陛下は養蜂も薬草やキノコ採りも、川の魚採りも、薪や炭も、全部無税にして下さっていた。道普請やら、軍の砦の設営の手伝いなんかは給金も下さった」

それが秘跡教会の連中は、薬草・キノコ・薪・炭を勝手に取り上げ、労役に狩り出した場合も無報酬、ひどい場合は食事も自己負担だそうだ。

「教会の審問官の連中はみんな欲張りで、物は取り上げるし、綺麗な女は見つけ次第『魔女』って事にして牢屋に閉じ込めて、縛り上げて拷問にかけるんだとさ」

腕の傷を治してあげたおじさんがそう言つと、子供の手当をしてあげたお婆さんがこんな風に続けた。

「あいつら女にちよっかい出す時は『祝福を受けよ』とか何とか言うんだよ。あたしはこんな面相だから、幸いそんな目には逢つてないけれど、リリアちゃんは、気をつけなよ？」

秘跡教会の連中の噂を聞けば聞くほど、僕は腹が立ってきた。

13・弟のようなもの？

僕は人間の傷ついた組織を幾度も修復する事を繰り返したおかげで、このフェドンの人間の体をコピーできるようにになったみたいだ。ひとしきり手当が済むと僕らは引き上げる事にした。リリアはお礼やら薬草や酒との交換やらで、穀物類を少々、パンやケーキの類を少々、他にはチーズ、ベーコン、野菜類、干し魚なんかを少しづつつ手に入れた。

「こりゃあ、荷物が多いね。僕、今なら人間の格好になれるよ。一緒に担ごう……あ、でも、服がなあ。妖精は葉っぱ一枚でも大丈夫だけど……」

「葉っぱを人の服に見せるぐらいは、私でもできるわよ」

「それって、リリアにはどう見えるの？ 葉っぱのままなの？」

「ええ、それはそうね」

リリアの前ですっぱんぽん、と言うのがどうにも僕としては嫌なのだ。人間はごまかせてもリリアの目はごまかせないなら、今一つだと言える。

（ファキさん、なんか方法ないですか？）

（採り込んだ組織の中から、さして必要じゃ無い物を膜状にして、服に見せかける事なら出来るよ）

へええ、やっぱファキさんには、聞いてみるもんだなあ。

（ほう、そうですか。ならやってみます）

僕はリリアのポケットから飛び出して、十代前半の男の子と言う感じに体を作り、農民の子供風の服を着た状態を何とか作り上げた。髪と眼の色はリリアに合わせて、金髪碧眼にした。

「まあ、綺麗な男の子になったじゃないの」

「これなら、荷物を持てると思うよ」

「じゃあ、半分頼むわ」

荷物は楽々担げる感じだったので、ほとんど全部僕が担いだ。

急ごしらえの肉体なので、手足や顔はリアルだが、服で隠れる部分はマネキンかなんかみたいのにのっぺりしている。つまり、男女不明の形だ。だが、実用上は問題ない。必要になったら、必要な部分をきっちりコピーして作り込めばいいんだから。

「あたしの弟分って事でいいわね」

「うん。そう言う事にしておいて」

「あんた、もともと人間だったんでしょ？ 人間の食べ物が恋しいんじゃない？」

「でも貴重品だろ？ しずくの格好に戻れば、ほとんど飲み食い無しでも平気なんだ」

「あたしも普段の食事は花の蜜と薬草ぐらいで、人間の食べ物は要らないの。でも、人の食べ物は、美味しいから、時々食べたくなるの。食べると、人間の言葉や気持ちが良く分かるようになるみたい。特にお菓子は甘くて美味しいわねえ」

「蜂蜜と穀類なんかでも、お菓子の仲間は出来そうだけだな」

リリアは穀類は大抵お粥かスイトンみたいにして食べているらしい。ケーキやクッキーが穀類の粉と砂糖・バター・卵なんかを使って作るって、知らなかったみたいだ。

僕がクッキーのざっとした作り方を説明すると、すごく興味を持ったらしい。

「帰ったら、早速、そのクッキーが食べたいな」

「僕も上手くいく自信はないけれど、まあ、煮炊きする道具を見せてもらって、やり方を考えるよ」

かなり大変な事件の後にしては、えらくのどかな雰囲気僕らはテクテク森の中を歩いて戻った。

リリアの住み処の大樹の根っこの裏側に、人間の住まいにしては小さすぎる石造りの小屋が有った。小さい割にはしっかりした作りで、出来の良い物置って感じた。その中に煮炊きする道具や、人間の食品類がしまつてあつた。砂糖は貴重品だけど、蜂蜜は豊富に在庫が有るみたいだ。

「火を使うのはここかな？」

「そうそう。一応煮炊きが出来る感じでしょう？」

外部の壁面に添って、炉が作つてあつた。それに上手い具合に、地球でキャンプ用に使うダッチオーブンとほとんど同じようなタイプの、分厚い蓋が有る足付き金属鍋が有った。

最近は何沙汰だが、小学生のころまでは毎年家族でキャンプをしていて、ダッチオーブンの取り扱いなら僕も慣れている。火を起こすのは手伝ってもらったが、後は大体自分で出来た。

蜂蜜と小麦ほど貴重ではない雑穀類の粉と木の実をつぶしたものをこねて、小さく丸めて伸ばして、ダッチオーブンに入れて、火加減に注意して焼いたら、マコロンが焦げたみたいな物が出来た。美味しい店のマコロンからすると首をひねっちゃう、実に粗末な物だが、リリアは大喜びしてくれたようだ。

「あんたって、最高の弟だわ！」

そう言って、僕にデコチューしたぐらいだから……

フランス風の高級マカロンと日本的な駄菓子風マカロン、どちらも美味いが、リリアが地球のコンビニのお菓子類を見たら、さぞかし狂喜乱舞するんだろうな、なんて僕は思った。

14・噂

リリアと一緒に動くようになってから、フェドンの時間で三日が過ぎた。僕は宿賃代わりに、リリアのために有る材料で工夫して、料理を作っている。

「しずくに戻ったワタルを、ベッドの上に乗せておくことなんて、厄介でも面倒でもないのに」

リリアはそう言うが、清潔で気持ちの良いシートの上で寝られるのは、気分が良い。僕の体が毎晩しずく型にリセットされなければ、それはそれでいろいろ問題だが、リリアは気にしていないようだ。

「もう一つベッドを小人のおじさんに作ってもらえばいいじゃない。人間の形がいいなら、下の小屋を使いやすいように増築でもして、住むって方法も有るわよ」

ともかくも今は、綺麗な羽を持った小さな妖精の隣で、僕は毎晩気持ちよく寝ているのは確かなのだ。

これまでリリアは食材同士の組み合わせと言う奴が、どうも理解しがたかったらしくて、ただ食材を単品で茹でたり蒸したり焼いたりしていたのだ。

それで僕が簡単なシチューのようなものを作ったり、ピザもどきを作ったりすると、すごく喜んでくれた。そのうち、あの愛想の悪い「小人のおじさん」まで一緒に食べるようになったのは、意外だったが、おかげでこれまで全然わからなかった龍とか巨人とか狼人間とか人魚の噂を、ちよつとばかり聞くことが出来た。

そうした人間より力が有ったり寿命が長かったりする種族は、皆、

個体数が恐ろしく少ないらしい。そして、大抵はリリアがそうしているように、必要に応じて人間に姿を変えるらしい。

「幾つもの物に姿を変化させられるなんて、何万年も生きている賢い龍ぐらいのじやろう」

「そうよねえ。あの教会の連中に言わせれば、龍は魔物になっちゃうらしいけど」

「姿を変化させられん人間は、やっぱり下等なんじゃよ。理解できない物は、全部魔物扱いするんじゃない」

小人のおじさんは、そんな事を僕に言ったくせに、リリアによれば姿を変化させたことなど、一度も見たことがないそう。リリアも小人のおじさんも、僕みたいに人間にも妖精にも姿を変える存在に出くわしたのは、初めてなんだそうだ。

あの騒ぎ以降、レフカ村以外でも異端審問官の連中は様々な騒動を起こしているらしい。一体何人の異端審問官が居るのか知らないが、噂は日を追うごとにエスカレートしている。

「綺麗な女は審問官が来る前に隠れないと、全員牢屋に連れて行かれる」

「美味そうな食い物は、とりあえずタダで全部持って行かれる」

「亡くなられた皇帝陛下の事を褒めたら、それだけでぶちのめされる。運が悪ければ牢屋行き」

やっぱり、調査に行くべきだろうな。だが、リリアは戦闘能力は高くないから、用心が必要なんだが。

「僕、別の村に出掛けてみるよ」

「レフカ村以外の？」

「うん。怪しまれないで売れそうなものって、なんか無いかな」

「薬草じゃ魔女って言われかねないのよね」

「うん。蜂蜜なら一杯簡単に手に入るの？」

「ええ。あたしは花の妖精だから、狂ってないまともな蜂とは友達だから、簡単に蜜も集まるわ」

僕は炒り豆の粉と蜂蜜を合わせて加熱し、冷まして棒状にしてから、指の頭程度のサイズに切り分けた。そしてそれを一個づつ、保存性を高める効果があるらしいこの大樹の若葉で包んだ。

「食べるときは、葉っぱは外した方が美味しいな」

「飴だけでも美味しいけれど、葉っぱの香りが爽やかで、良いわね、これ」

「売れるかな？」

「売れるわ。売りに行きましょう」

リリアが言うには、どこの街でも市場の取り仕切り役に話を通して、店を出すものだが、十日に一度程度の頻度で、誰でも店を出して構わない日を設けている村や町が幾つかあるそうだ。

「レフカ村から平原に向かう途中の谷あいには、マウサって言うレフカ村よりはかなり大きい村があるの。その市は『食べ物・飲み物に限り』自由に店を出せるから、そこに行きましょう」

マウサ村は炭を焼き、鍛冶仕事をする連中や陶器を焼く連中がたままって住んでいるらしい。食べ物や飲み物は常に不足気味なので、来てくれる分には大歓迎という事らしい。レフカ村よりちよっと大きい旅籠が一軒と、飲み屋兼食堂が二軒で感じらしい。

「マウサ村では時折、人に姿を変えた何者かが商売をしている、っ

て噂が有るのよ」

リリアの言う通りなら、うまくすると人間に姿を変化させた他の種族と出会えるかもしれないのだ。

15・マウサ村での出会い

「この豆の粉と蜂蜜で作った飴、すごく気に入っちゃった。売り物は食べる訳に行かないけれど、また、戻ったらもつとたくさん作ってね」

リリアは甘党なのだ。この黄な粉飴もどきみたいな代物でも、すごく喜んでくれている。でもまあ、今回は商品だからたくさん食べてもらおうわけにも行かないが。

「村でふくらし粉とか酵母とか、後は砂糖とかバターなんかがあるちよつと手に入ると、また色々作ってあげられるお菓子の種類が増えるよ」

「まあ、そうなの？　じゃあ、ぜひとも手に入れないといけないわね！」

僕は今度は男の子じゃなくて、大人に姿を変えてみることにした。

「どうこの顔？」

「何だか、残念な顔。折角だから、もつと綺麗な顔にしてよ。その方がうれしいわ」

僕が目をつけられないように地味な顔に作って見せたら、リリアは露骨に嫌そうだった。そこまではつきり言われちゃうと僕もめげる。そこで僕は幾人かのハリウッドのスターを思い浮かべて、良い所取りをした顔にした。手入れの行き届いた感じの口髭もつけた。

「あら、こんな髭だったら、生えていても嫌じゃないわ。お父さんはちよつと無理かな。若い叔父さんかお兄さんで良くない？」

「じゃあ、兄さんでいいや。兄さんとして忠告すると……」

僕はリリアの胸は露出を可能な限り下げた方が、魔女呼ばわりを避けやすいと思うと伝えた。

「そうなの？ 胸がちょつと見え気味の方が、良く売れるって思っていたんだけど」

「男の客が寄ってくるって事だろうけれど、異端審問官に目をつけられやすいと思うよ」

僕の言う事に納得したのかどうかは分からないが、「真面目そうな兄さんには、地味なりの妹の方がじっくりくるわね」なんて言つて、襟のつまつたグレー系の地味な服を着る事にくれた。

今回は小人のおじさんが、僕の説明をもとに小ぶりなりヤカーと言つか大八車というか、そんなものを作ってくれたので使ってみる。

「坂が多くて峠越えも有るレフカ村に行く道には向かないけれど、平地の方にどんどん降りて行く途中のマウサ村なら具合がいいわね」

マウサ村への距離自体はレフカ村より有るようだが、リリアの言うようになだらかな下り坂が続いて楽だ。僕が車を引き、リリアは手ぶらだ。帰りは上り坂だが、荷物が重くなるほど買い物はしないだろう。

村に入るといきなり怒号が飛び交っていてビックリした。

「おのれ、化け物め！」

「あたしが化け物なら、お前さん達は盗人だ」

「お、男をま、まとめて五人も飛ばす女がいるか！」

「おや？ あんたらが勝手に料理屋で酒嚢を空っぽにして、代金を踏み倒して来たんじゃないか。女将さんに詫びを入れな。本来なら腰の剣でも質に入れて、代金を払えって言つ所だけど、せめて半額

だけでも払って行きなよ。残りは今度って事で、勘弁してくれるって女将さんも言うはずだからさ」

尻もちをついている五人の男は、明らかにあの、異端審問官のお供についている秘跡教会の連中だ。それを追いつめている女の人、野武士か傭兵みたいな武骨ななりだが、確かに女の人だ。だが……綺麗すぎる。何というか、綺麗な銀髪の美人なんだが、淒味が有りすぎる。それに妙な波動を感じるのだ。何と言うのか……人間サイズじゃない、大きな生き物の波動だ。目に見える体の大きさと不釣り合いだ。

「有り金全部、置いていきな」

「じよ、冗談じゃない！ わずかばかりの酒に、そのような金は払えぬ」

「そう言うのは無銭飲食、踏み倒し、飲み逃げ、まあ何にしたって勘定を払わないんじゃ、盗人だよ」

明らかに追い詰めている女の方が、強いと見たのだろう。

男の一人が、急に地面を蹴って、走り出そうとした。と、その途端、財布がドサツと落ちた。

「じゃあ、財布は預かっておこう」

その言葉が終わるや否や、他の四人の財布も、ドサツと落ちる。

「ヒューッ」

「ば、化け物」

五人とも勝手な事を言って、財布を放り出したまま、走ってその場を逃げ出した。

奴らの財布が落ちたのは、僕の所為なんだがな。うんと細い触手を瞬間的に伸ばして、財布を掴んで落としたんだが……

「その、あんた、待ってくれ」

さすがだ。

この銀色の髪で目がグレーのおねえさん、一発で見破ったな。何しろ僕を見て、ニヤツと笑うんだから。

16・ダナ

「君の名前を教えてください、若いの」

僕が無視して立ち去ろうとしたら、いつの間にやら間合いを詰められ、じつと顔を見られた。背中に業物らしい大きな剣を背負っている。ホント、武者者って感じたな。それにしても、若いの？　じやあ、このおねえさんて、実は超高齢者？

「あ、あの、僕ですか？」

「ああ。君以外、誰がいるかね」

「……ワタルと言います」

「変わった名前だな」

「そうですか」

「私はダナだ。よろしく」

「あ、あの、百人力のダナさん？　ああ、そうだ。そうですね」

リリアの反応からすると、相当有名な人だったりするのかな？

「えっとね、まだ、皇帝陛下が御健在の頃だけど、用水路を作るときに、如何しても動かしたいのに村の人総出でも動かせない大岩が有ったのだけど、ダナさんが手伝ってくれた、って言うかダナさんが一人で軽々動かしちゃったって事が有ったの。皇帝陛下は『百人力のダナ』に感謝状と褒美を遣わされたんだけど、感謝状だけを受けて、御褒美の方はマウサ村の皆さんに分けちゃったの」

「改めて、そんな風に言われると照れるよ。妖精のお嬢ちゃん」

「ダナさんて、眼の効く方だって噂はかねがね聞いてましたけど……なぜ、あたしを妖精だと？」

「どう見たって、可愛い花の妖精だろう。違うかい？」

「時節柄、そのう、僕らとしても用心している訳で」

「なるほどね。さっきの奴ら以外、困った方面の関係者は村には居ない。安心したまえ」

「おっしゃる通り、あたしは花の妖精ですが……すぐにそれがお分かりになるダナさんで……」

「少なくとも、人間じゃないですね」

僕の問いに、ダナさんはニヤツという感じの笑みを浮かべた。

「それはそうだが、ワタルも違うだろう？」

僕が返答に困っていると、リリアがこういった。

「この子、あたしの弟みたいなものなんです」

「弟？ 兄に見えるが……」

「僕は、老け顔なんです」

「弟みたいなのというが、ワタルは花の妖精じゃないだろう。不思議な気配を背負っている。私も相当長く生きて来たが、さっきの財布を取りだしたやり方は、初めて見た。銀の糸を吐く蜘蛛がワタルの本体なのかと思ったが、あれは糸ではなさそうだったし、何なのか分からなかった。どういう事なのか、教えてくれまいか？」

僕は蜘蛛が人型を取ると言う可能性がある事の方が、びっくりした。

「蜘蛛でも、人に化けるんですか？」

リリアが言うには、妖精と付き合い、霊泉の周辺で生活していると、そんな能力が身につく蜘蛛が時折いるそう。ダナさんもその解説に頷いていたから、このフェドンという世界では常識らしい。

「別に珍しい話でもなかるうに……ひょっとして、ものすごくワタルは若いのか？」

「この子、十六歳なんですって」

「そりゃあ、若い。というか、本当に人間なのか？　たとえばあれは魔術なのかな？」

「僕は……異世界の人間です」

「ほう、そうか」

「ダナさんは……龍ですか？」

ダナさんは一瞬目を見張ってから、にこやかな表情になり、こういった。

「ああ。良く見抜いたな。その通りだよ。かつては白龍のダナ・ダヌ・ダナヴァスと呼ばれていた」

それを聞いたリリアが、仰天したと言う顔つきになって「どうしよう、どうしよう」と呟いている。そう言えばこのフェドンでは本当の名を知らせると言うのは、特別な意味が有るんだっただけ。

「僕らに名前を覚えてくれたのは、なぜなんです？」

「君たちと親しくなりたいからだ。君たちの波動はそれぞれ魅力的だし、それに何より、少なくとも君たちと一緒に居ると、退屈しないで済みそうだからな」

聞けばダナさんは三万歳は越えているらしい。背中に背負っている大剣は「大切な預かり物」だそうだ。どうもその剣を預けられた事情から、東の山の洞穴を出て人の姿を取って暮らすようになったらしい。

「剣を預かる前は、人を食った事も有ったんだがな」

そんな事を言っ
て、僕らの作
った豆の粉入
り蜂蜜飴を口
に放り込
んだ。

「おう。こりゃあ、美味しいよ。もっとたくさん作って、デカイ街に
売りに行くか？」

何だか成り行きで、思いもよらぬ事になるのかも知れない。

17・一時帰宅

龍のダナさんと知り合った翌日の起床時に、ファキさんが話しかけてきた。

（ワタル、明日で夏休みが終わるぞ。地球に残した体は、元の人型に簡単に戻る事が可能になったはずだ）

（お？ もう、そんな時期ですか。じゃあ、今後の事も含めて、一旦帰るかな）

（先が長くなりそうなフェドンでの活動を考えると、その方が良かった）

僕が一旦、帰宅すると言っても、リリアはあっさりしたものだ。た。

「用事が済んだら、こっちに帰るでしょ？」

「ああ、そのつもりだ」

「じゃあ、待ってるね」

小人のおじさんに至っては、感想すら無し。

一時にせよ別れる事に対して、こだわ리を持ったのは何のことは無い、僕だけだったようだ。ガツクリしている僕の表情を見て、リリアは逆に驚いたみたいだ。

「もしかして、二度と会えないの？」

「いや、そうじゃないはずだ」

「本当に？」

「ああ」

また会えるのなら、気にしないのが当然という感覚らしい。リリアは両親と別れて千年近く経つけれど、互いに無事で元気だから、特に会う必要も感じないそうだ。誰かの葬式か、妹か弟でも生まれるかでもない限り「親の所に行く必要なんて無いわ」と言い切った。

「顔を定期的に見せに行かないと、御両親が心配するとか寂しがるって事は全然無いの？」

「父さんと母さんは、いつも二人でイチヤイチヤしていたんだから、お邪魔なの」

「そ、そういうもの？」

「そうよー」

リリアは「子供と言っても、邪魔なのよ」と言うが、僕の場合はイチヤイチヤの成果として出来た子供は、他の存在とは違うんじゃないのかなと思うのだが、どうなんだろう？ リリアの両親に聞いてみなくちゃ本当の所は分からないって気がする。

小人のおじさんに至っては、誰が親なのかよくわからないのが当たり前なので、僕のウェットな「人間っぽい」感情は理解不能って事らしい。

僕はしずく型に戻った。そして、その肉体はリリアの眠るベッドの棚の上に置いておいてもらう事にした。

「何か急ぎの用事があったら、このしずく型の体に呼びかければ良いのね？」

「多分、それでイけるはずなんだけど、僕も初めてでちょっと心配」

「ワタルなら、きっと大丈夫よ」

「うん。じゃあ、また来るからね」

僕の意識は、日本の自宅の僕の部屋のベッドの中にあるスライム状態の肉体に戻った。

携帯のメールが幾つか溜まっていたので、急いで返信する。大半は高校のクラスの連中で、夏休みの課題の事だった。後は、ああ、休み明け早々に実力テストと模擬試験の予定だから、みんなそれなりにピリピリしてるのかな。

「そうそう、制服がちゃんと着られるんだろうな？」

僕は壁にかけっぱなしの制服を、着てみようと思った。すると、思っただけなのに……

「おー、元通りだ。あ、でも全裸だ」

妖精に姿を変えた時より、ヒゲの金髪兄さんに変身した時より、ドキドキする。どうやら体は元通りの形だ。ともかく、下着下着！

僕が愛用してる五枚組二千円の綿百パーセントの涼しいトランクス、ちゃんと引出しに納まっていた。もともとは母さんが通販で注文した品物だが、縫製もしっかりしてるし、風通しもいいし、僕は気に入っている。

「やっぱ、ボクサーパンツっしょ」って言う兄貴の言葉や、「男も勝負パンツは必要だと思うわ」と言う姉貴の言葉は僕には全然ピンと来ない。

トランクス一丁で、団扇をパタパタさせてテレビのニュースを見ながら、冷蔵庫から麦茶を取り出して飲んでいたら、両親が戻ってきた。

「航、あんた戻ったの。おかず足りるかしら」

「レトルトのカレーで十分だよ」

「あれ？ 在庫有るかな。冷凍のピラフでもいい？」

「何ピラフ？」

「梅とシラス」

「そんなの、あるの？　良いよ、それで」

母さんは冷凍庫を引つ掻き回す。僕が兄貴がいると、ちゃんと整理整頓しておくんだが、母さんは料理は上手いくせに、食品の在庫管理は下手だ。さっき覗いたら、僕の留守の間に、冷蔵庫はちよつとばかりカオス化していたもんな……

「あー、カレーピラフとキムチピラフも有るわ。どれがいい？」

同じ種類のものをちゃんと固めて、収納すればすぐわかると思うんだけどな。今更言っても仕方がないと、父さんも兄貴も姉貴も諦めている。御機嫌を損ねて、飯が不味くなったらやぶ蛇つてもんだ。

「じゃあ、カレーピラフ」

そのカレーピラフをかき込んだ後は、どうにか美味い手料理にありつけそうだ。

18・これまでの登場人物まとめ

どつめき・わたる
・百目鬼航

十六歳・高校二年生。銀の玉と適合してから、スライムな先祖の保有していた力が目覚める。大都会に比較的近い過疎地に住む。陸上部員。普段は小さな医院を営む両親と暮らしている。兄の滋と姉の環は遠方の大学に在学中。

・フェドンの皇帝だった男

血まみれでいきなり航の目の前にあらわれて、銀の玉を「適合」させて「フェドンを頼む」と言い残して消える。元来地球のローマ帝国で戦死しかけた優秀な人材をベースにした融合体だった。

・ファキ・ネット

巨大なスライム。本名はファキ・ンティバントウンガニャ……なんたらかんたらと長く続くらしいが、普段はファキ・ネットで構われないらしい。航の直接の先祖である巨大スライムのカソマ・ニトと元来は同一の個体だったと言う。「適合」後の航と頻繁にコンタクトを取り合う仲。

・カソマ・ニト

航や航の家族の直接の先祖。カソマとしての意識・存在の枠を捨て、地球人に同化し増殖する道を選んだ。

・コツパ

仮にファキが名付けただけで、本来の名称由来とも不詳。真つ黒けの毛玉から一本だけの短い棒状の足だか何だかを突き出した形の生き物らしい。異世界フェドンを狂わせている元凶。

・リリアーナ・リリー

異世界フェドンの花の妖精。見た目は金髪碧眼巨乳美少女。フェドンにおける最初の友達。通称はリリア。見た目よりずっと長く生きているらしい。両親は健在で、仲良しカップルらしい。

・小人のおじさん

名前は不明。偏屈で見た目が老人だが、リリアよりかなり年下らしい。

・ダナ

実は白龍のダナ・ダヌ・ダナヴァス。人型の状態だと銀色の髪で目がグレーの綺麗なお姉さん。普段は背中に大きな剣を背負った武者のいでたち。

・父さん

医師。働き者で温厚な性格。地域の人たちに信頼されているが、金儲けは下手。家族も患者もとても大切に考えている。母さんとは従兄妹同士で幼馴染の関係。

・母さん

医者以外のすべての役をこなす、百目鬼医院のスタッフにして、料理の名人。整理整頓がやや苦手。

19・もうすぐ文化祭

「百目鬼君、すっごいじゃない!」

「一位だな、一位、すげー」

「君の健闘を祈ってきた小生に、アイスをおごってくれたまえ。何なら新作のソフトクリームでもいいよ」

「ちょ、お前、何催促してんだよ。あ、でも、新作のソフトクリーム、くいてー」

僕は生まれて初めて実力テストで一位を取った。と言っても僕の実力じゃ無い。だって、授業中に密かにミストを飛ばし、それを再び呼吸して吸い込むのだ。そうすると教師の考えている事、これから出題しようとしているテストの傾向までわかってしまう。そんな訳で実に簡単に効率の良い勉強が出来たのだ。

（抜け毛の一本でも取り込んだら、その人間のすべてを知ってしまう事が出来るけど）

ファキさんにそんな空恐ろしい事を教えられた。その気になれば、抜け落ちた毛髪なり体毛なり、手に入れるのは容易そうだったが、そんな事までしたくなかった。僕自身の細胞に相手のすべての情報を植え込むってわけで、気持ちが悪いつて感じちゃったのだ。

（親とか兄とか姉とか……あるいは好きになった女の子でもないと、そんな事は出来ないって感じるよ）

僕のこの感想は、人間としては健康な感覚じゃなかるうか？

あ、でも、そもそも人間に相手の情報すべてを取り込むなんて出

来ない訳だが……

学校が終わると、僕らはそれぞれ自分の払いで、学校の帰りにコンビニのイトインコーナーで最新作のソフトクリームを仲の良い八人で食べた。全員、中学時代からの仲間だ。

「文化祭の出し物をそろそろ検討しないといけない時期だな」

そんな話を始めた者がいて、いつしか話題は文化祭の事に移った。例年の通りなら何か食べ物を出す露店か模擬店をやる可能性が高い。その為に準備やら企画立案やら、そろそろ確かに考えないといけない時期だ。だってもう、夏休みも実力テストも済んだのだから。

「ねえ、来週、うちのお兄ちゃんが通う調理師専門学校で、オープンキャンパスというか、高校生対象の説明会って言うか、そんな感じのイベントやるんだけど……」

高校生に学校を見せて、その学校に進学を決めてもらおうと言うイベントは、各専門学校なり大学なりでかなりこの時期行われている。春や夏休みも行うが、秋のイベントはもっと真剣味というか切迫感が有るように感じられる。その調理師専門学校は卒業生である幾人かの高名な日本料理の料理人やらイタリアンやフレンチのカリスマシェフやらを呼んで、特別講座を行うらしい。

「美味しいものが試食できるのよ、それだけでも行く価値が有ると思うわない？」

「ここって、最近大学行くのを止めて進学する人も多いって言う本格派なんだよナ」

「卒業生がすごいもんな」

その卒業生のすごい技やら美味しい料理やらで、高校生の気持ち
をグッと引き付けようって事なんだろう。なかなか悪くない企画だ。
僕自身は大学に行く希望は変更する気はないが、真剣に料理の仕事
を目指す人間が増えるのは良い事だと思う。

「一日聴講生になるには、この申込みシートに書き込んで、ファッ
クス送れば良いみたい。ファックスするんだから、コピーだって構
わないのよね、ここにそう書いてあるし」

話があっさりまとまった。早速規定の申込用紙を人数分コピーし
て、それぞれ必要事項を記入して、コンビニからファックスで専門
学校に送った。三日間に渡るイベントだが、皆それぞれ都合が有つ
て、僕と一緒に最終日のイタリアンのコースを選択したのは男子が
他に二人だった。言いだしっぺの女の子はお兄さんが高名な調理人
の助手役を務めるとかで、絶対に初日の日本料理と決めていたし、
他の女子は二日目のフランス料理を選んだ。デザートにつられたの
か、シェフが芸能人並みに華やかなハンサムだからなのか、はつき
りしないが……

ともかくも全員、その学校の図書室に有ると言うお好み焼きやク
レープやたこ焼き、焼きそばの名人技のDVDをちゃんと見てこよ
うと言う事は決めている。そのあたりのメニューを文化祭で扱う可
能性が高いのだ。

「航くん、頼りにしてるわよー」

男子に肩を摩られて猫なで声で言われても、薄気味悪い。

「お前はオカマかよ」

僕が黙っていると、陸上部の仲間が突っ込みを入れた。

「俺のばあちゃん、大蒲佳代おおかまかよって言うんだぜ」

「ウソだあ」

「いや、これがほんとにほんと、大真面目なんだなあ」

僕が一言も反応しない内に、周りは爆笑の渦だった。僕も笑った。フェドンに憑りついた、デカイ有害生物コツパを弱らせるのに、ひよっとして料理が使えるのではないか？不意にそんな考えが、僕の頭に浮かんだ。

（確かに、悪くない考えだと思うよ、ワタル）
すぐにファキさんからの反応が有った。

（じゃあ、料理について、真剣に勉強するよ）

文化祭が終わるころに一度フェドンに戻りたい。皆、どうしているだろうか？

こんな風に思うのは僕だけで、リリアなんかはあっさりとおっけらちゃんと鼻歌でも歌いながら、花の蜜を集めているのに違いはない。そんな気がする。

20・料理の意義

（ワタルの波動を帯びた食べ物を皆が食べるようになると、大きな助けになるだろう。あちらは地球よりかなり素朴な社会構造だし、料理法も単純で種類も限られている。ワタルは料理が好きなようだから、やりようによつてはフェドン全体に大きな影響を及ぼす事が出来るだろう）

どんな生命体も捕食してエネルギーなり栄養なり取り込むわけで、そこに注目して影響を与える事がひょっとしたら可能なんじゃないかと思いついたのだったが、ファキさんの意見を聞いてますますやる気が出た。

（フェドンで外食チェーンとか、料理なり菓子なりブームを作るとか、そんな感じになれば良いのかな？）

（大手のチェーン店のように「うまい・安い・早い」ものは、きつとフェドンでも大いに流行るだろう）

ファキさんは牛丼を食ったわけじゃないらしいが、僕の記憶を読み取って、その食べた時の味わいや香りまで追体験できるらしい。だが、本当に牛丼を食うような事はしたことがないし、したいという欲求自体もわかないようだ。ファキさんの「食料」は精神的な波動なのだから……とは聞くが、僕はまだ、実感を持って共感出来ない。人類として育ってきた僕には、理解が難しい感覚だ。

（美味しいと感じるものを食って、喜んでいる、あるいは幸福感を得ている人類の波動は、なかなかの良い感じなのだ）

（でも、それって、コッパにとつても美味しいって事なんじゃない

ですか？)

(あいつは美味い不味いなんてわかるものか。幸福も不幸もわかってないんじゃないかと思う。ただひたすら、強烈な感情、強い波動が欲しいだけだろう。ワタルの料理が美味くて、皆がワタルを意識するようになるのはコッパの立場に立てば、非常に厄介で不都合だろう。コッパは自分以外の存在の影響を全く受けていない精神波動を求めているのだから)

(料理で皆が僕を意識すると言うのが、重要なんですネ？)

(ああ。だから、ワタルの名前を強く印象づけることが可能な美味い料理が好ましい)

頭の中でこんなやり取りをしながら、僕は何食わぬ顔で学校の仲間たちと専門学校の図書室で、色々料理の本をひっくり返していた。他の連中は知らないが、僕は少なくともガスも電気も無い環境でも作れそうなメニューについて真剣に調べ、更には薪や石炭を使う料理用のオーブンとか料理用のストーブとか言う代物についての文献のコピーを取ったりした。

「おい航、始まるぞ」

声をかけられて、僕も急いで外に出た。図書室のすぐ外の広場には、幾つかの屋台形式の模擬店が出ている。美味しい学生食堂メニューの試食やら、イタリア料理の調理実習も素晴らしかったが、今回はこの屋台コーナーの見学が、一番の目的になっていた。初日と二日目に見学した連中が「絶対にキチンと見てくるように」と最終日見学組の僕らにも、念を押したのだ。

ただの屋台のようだが、実は作っている人たちもこの学校の関係者で、ちゃんと実習や勉強の場所になっているのだ。取扱い品目はたこ焼き、焼きそば、ジャガバター、クレープなんかだが、さすが

学校だと思ったのは、それぞれで調理のコツをポイントを押さえて教えている事だ。

一番人気はたこ焼きだ。前日見学した連中も言っていたが、人気は文化祭で扱う物を決めるうえで、大きな要素だ。せつかくの商品が売れてくれなくては、もうけどころか大赤字になってしまう。

たこ焼きは材料費が比較的安くて済み、レンタルの業者から器具類も比較的簡単に調達できる。ただ、料理の初心者には難しいメニューではないかと言う点だけは心配なのだ。だからこうした製作現場での見学が重要なんだが……

「生地や具材の調整加減で、原価の低い物もできます。例えば不可欠なもののように考えられている卵も、無くても十分美味しく出来ます。山芋を入れようが、粉を吟味しようが、焼き方がアウトならアウトです」

軽い関西訛りが有るところから、本場出身の講師らしい。たこ焼きの焼き方でちゃんと特別授業になっているのだ。簡単な生地の配合までプリントして配ってくれた。

先生によると、丸くしようと何度も生地に触るのは厳禁だそうだ。一見雑に見えてるぐらいの返し方で良いものらしい。半分返して中のドロツとした生地を出し、その生地が固まったのを十分確認してから半回転させるべきなのだ。生地を投入してから、最初の半回転させるまではほとんど生地を触らない。内部に意識的に空洞を作るべきであるらしい。空洞が存在しないと生地の温度が十分に上がらず、ベトベトした不味い感じに仕上がるそうだ。

外がサクツ！中がジュワツ！という感じに仕上げるためには、空洞を生じさせてたこ焼きの内部温度を高くする必要が有ると言う説明……温度計まで投入してたが、そのおかげで僕らも生地を弄りすぎたらなぜアウトなのか、理屈込みでちゃんと理解できた。

僕は抜かりなく講師の先生の波動を取り込んで、パーフェクトな焼き方をマスターしてしまったのは言うまでもない。高校の友人たちは僕が単に「料理上手」で「手先が器用」なだけだと思うだろうが。

熱源はともかく、たこ焼き器の半円状のくぼみの鉄の部分は、小人のおじさんでもどうにか出来そうに僕には思われるのだが、実際どうだろうか？

（フェドンでたこ焼きって、どうかな？）

（大当たりするかもしれないな）

問題は中の具材かあ……タコは恐らくアウトだからなあ。

気が付くと、最近の僕はフェドンでどうするかって事ばかり、考えているみたいなのだ。やっぱり、あの異世界が懐かしいのかも知れない。

20・料理の意義（後書き）

航は最終日見学ですね。訂正しました

21・再びフェドンへ

文化祭当日、うちのクラスの出し物のたこ焼き屋は大繁盛だった。理科室の一角を借りて調理場にして、座席は廊下に設けた。屋内なのである程度天気に左右されず売り上げが期待できる……などと最初は思ったが、予想外の大入り大繁盛で、僕も驚いた。

「ああ、カツオ節がユラユラ、やっぱこういうもんは焼きたてに限るね！」

「外がカリッと中がトロでいい感じた。ソースが変に甘すぎないのもいいな」

「航くん、すごい、殆どプロじゃん、プロ」

「お前の『すごい』って薄気味悪いよ」

男子の勝手なしやべりを尻目に、女子はクスクス笑っている。ひそひそ話す声は小さくて調理している僕には聞こえないが、どんどんさばけていくからには、味は悪くないのだろう。

価格設定は五個で二百円だ。クラスの皆が購入した経験のある幾つかの店より価格は安い。お釣りの計算が楽で、端数の付かない値段ということ皆で決めた。

「六個三百円程度のお店が多いんじゃない？　ここは少し安いわ」
「良いお味ねえ。このままで商売が出来そう」

僕の目の前の席に座ったのは、恐らく生徒の母親なのだろう。中年と言いか初老というか、そんな年頃のオバサン二人は火加減や生地についても、細かい鋭い指摘をしながらたこ焼きをつついていた。高校生のチェックより随分厳しい。緊張したが、褒めて貰っていたようなので、ほっとする。

ともかくも僕は、焼いて焼いて焼きまくった。一緒に展示を見て回るような約束をした女の子もいないし、特別に興味の湧く展示もなさそうだったから、たこ焼きに専念したのだ。

「百目鬼君、ずっと焼いているだけじゃないの？」

「あ？ ああ。もうすぐ材料を使いきっちゃうから、全部焼くよ」
「ええつとね、そのう……」

何かもじもじとしているこの子はクラスメートで、今、教室では僕の斜め前の席だ。

身長百六十センチ、体重五十キロでもう三キロほど痩せようと努めている最中らしい。どうやら無意識に僕はミストを飛ばして、彼女に関する情報を読み取っちゃったのだ。で、僕とデートしたい？ そうなのか？ すると向こうから男子が一人やってきた。ああ生徒会の会長か。僕がこの前、インチキで一位を取った実力テスト以外は、大抵彼が一位なのだ。会長はこの子が好き。ああ、おさななじみなんだな？ 何か最近些細な事で行き違いが有った。女の子の方は、彼がそこまで強い感情を抱いているとは知らないのか、なるほどなるほど。

ちょっとかわいい子だから、誘いに乗っても良いなとは思ったが、会長が一瞬僕を、すごい視線で睨んだ。僕は全然気が付かないふりをして、作業に専念する。すると、焼き上がりの匂いにつられて、またお客さんがやってきた。いつの間にやら彼女も会長も僕の視界から消えていた。

（これってチャンスを逃したって事になるんですかね）

（ワタルはどうしたかったのかな？）

（デートってものをしてみたかったような、でもあの会長に睨まれるのはきついな）

（ワタルなら、本当に好きになった人となら、ちゃんと深い縁がつけられるはずだ。心配はいらない）

そこまでの気持ちは全然なかったのだ。何はともあれ、すっかりたこ焼きを売り上げて、後始末やら掃除やらして夕方家に帰りついた時には、かなり疲れた気がした。

（それでも、まあ、フェドンでたこ焼き屋、やれそうな自信が湧いてきました）

多分たこじゃなくて、何か別の具材になるだろうが……

（器具の用意は、あの小人に早めに作ってもらう方がよさそうだな）
（どうやって、注文したい事柄を伝えたら良いんでしょう？）

ファキさんが教えてくれた連絡方法は簡単だった。それまで僕がその方法を考え付かなかっただけで……

まずはリリアの眠るベッドの棚の上に置いて貰った銀のしずくに呼びかけて、銀色の妖精型に変身させると、フェドンにおける僕の肉体を起動させた。リリアはちょうど小人のおじさんと話し込んでいたので、地面に絵を描いて説明をする。

リリアもおじさんもちよつと僕のいきなりの登場に驚いたようだった。主な僕の意識は地球の方に有って、情報をフェドンに送っているのだと説明すると「すつごく便利ねえ」と言う感じで羨ましがられた。

あとは、地球側のこの肉体をどうするかだが……これがなかなか厄介かもしれない。

22・先ずは準備

「地球上のこの体は、連休一杯はこの状態だよ。学校が始まる時に、また一度戻るけどさ」

僕はスライム状態だ。意識をフェドンの側に集中させるには、やっぱり地球側のエネルギーをなるべく抑えた方が賢いみたいなのだ。僕自身の能力が大きくなれば、地球でもフェドンでも同時に肉体を活動させることが可能になるらしい。

「陸上部は休むのか？」

父さんは僕が陸上競技で故障を起こさないように、スポーツマッサーとかトレーニングとか医学的な事も含めて熱心に教えてくれたし、応援もしてくれていた。

「考えたんだけど、早めに退部届出した。八月の全国大会で例年よりは良い成績も上げたし、切り上げ時かなって」

「異世界での仕事が無ければ、続けられたらだろうがな」

父さんは僕自身よりも陸上競技に思い入れが強いみたいで、ちょっと寂しそうだった。母さんは過労状態でおかしくなるより良いと言う考えのようだ。

うちの高校はこの地域では進学校なので、体育系の部活もガンガン練習に励むのは普通は二年生いっぱいだ。一部のものは三年生の夏の大会まで粘るが、有望な選手でなおかつ学業も優秀な場合のみだ。僕は彼らみたいにオリンピックの選考会にまでたどり着けそうなハイレベルの選手とは違う。県代表にどうにか入るかどうかって程度だ。それでも通常は退部となると、揉める場合は揉めるものだ

が、僕の場合実力テストの成績が一番だったから「進学の方で良い成績を上げてくれ」なんて励まされ方をして、退部届はスナナリ受け取ってもらえた。

「何か有ったら、この体に話しかければ良いのでしょうか？」

「そうそう。スイッチを切り替えるようにして、地球側に意識を戻すからさ。もつとも、あつちで取り込み中だと反応が遅れる可能性はあるけど」

「でもこっちの体が無事な様子なら、あつちの世界の航も無事だつて考えてよいのよね？」

「そうだよ。だから母さんもあんまり心配しないでね」

「無理しない範囲で、頑張れよ」

「ありがとう、父さん、じゃあ、行ってくる」

休日の朝食の席で両親とそんな会話をした後、意識をすっかりフエドン側の肉体に切り替えた。地球側の肉体はスライム状態で自室のベッドにデーンと乗った状態だ。食事も基本無しで良いし、かさばるだけで両親にさほど迷惑は掛からないはずだ。

「リリア、おはよう」

リリアは寢床から出て、新鮮な花の朝露と蜜を外で味わい、戻ったところだった。

「あらワタル、しばらく良いの？」

「うん。ほんの三日ほどだけど、お祭りが有るんだろ？ 地球の食べ物を作って、市場で売ろうと思ってさ」

「ワタルの力を帯びた食べ物皆に食べさせる事ができれば、邪悪な存在が人の心を支配しようとするのを、邪魔できるっの？」

「どうやら、そうみたいなんだ。だからなるべく沢山の人に食べてほしいな」

「小人のおじさん、ワタルに聞いたような玉を半分に切った様な形

の窪みを付けた焼き型を、どうにか作り上げたみたいよ。あれを使
って、何か美味しい珍しいものをワタルが作るのね？」

「うん。そのつもりだよ」

「じゃあ、早速焼き型を確認して、それから材料なんかも揃えてみ
る？」

「そうだな、小人のおじさんとも相談だね」

小人のおじさんは、ちゃんと人間サイズのたこ焼き用の型を作り
出してくれていた。地球より鉄が貴重で、銅の方が簡単に手に入る
様なので、銅製だ。さらには僕が幾つか伝えておいた薪を使う料理
用ストーブのイメージから、ちゃんと使えそうな代物を作り出して
くれた。こっちは鉄製なのでフェドンでは超高級品になるようだ。
だが、デカイ。パイやらパンやら焼くには向いているだろうが……

「おじさん、この料理用のストーブは実に結構な品物だが、運ぶの
は難しそうだね」

ざっと見た所、百五十キログラムは軽く超えそうだ。肩に担ぐよ
うな重さじゃないし、サイズじゃない。

「もっと小型で、火力は十分という代物が欲しいんじゃない？」

「うん。大きい方が火力は安定しているから、難しいお願いではあ
るんだけどね」

「ともかくも、やってはみよう」

「こういうのも有るんだが……」

僕は地面に図を書きながら、プロパンボンベのリサイクルタイプ
で災害時の炊き出し用だつて言う円筒形の製品と、ドラム缶を横倒
しにしたような焼成部分に本体に天板をとりつけた製品について紹
介した。こういうシンプルなタイプなら、上手くいけば総重量は五
十キロに満たないはずだ。ベースは別に、おじさんの得意な四角い

格好でも全然かまわない。とにかく薪を十分に燃やす事が出来て、天板部分でたこ焼きが焼ければ良いんだから。とまあ、思いつく限りの話はした。

それにしたって、気難しいおじさんが案外あっさり僕の注文を受けてくれたので、驚いた。大きい方も馬なり何なり、荷物運びの目途が立てば、離れた村にも持つては行けるだろうが、今は無理だ。だが……

「ワタル、やはりここだったのか」

おやまあ、百人力のダナさんじゃないか。どうやって、僕がまた戻った事に気が付いたのだろうか？

23・ファーストキス？

「ワタルの気配を水の精霊が感じとって、私に教えてくれたのだよ」

ダナさんは妖精状態の僕を見ても全然驚いていない。リリアの弟のようなものって説明はしてあったけど、人型しか見ていなかったはずなのだ。事情を多少承知していたとはいえ、こうも平気なもんだろうか？ まあ、僕なんかよりずっと長生きしているから、色々なものを見たり聞いたりしているのかも知れないが……。

「水の精霊って、水の中にいたりするんですか？」

「ああ、ワタルにはやはり見えないのか。清らかな水の中に住む精霊たちは、そのリリアと似通った姿形をしている。だが、背中に羽は無く、足に水かきがついているのは大きく違うところだな」

良くわからないが、綺麗な泉なり川なり一か所あたりに一人みただけで存在するそう。本人たちは自然発生的にその場所に存在するようになり、名前を付ける親もいるわけじゃないので、一人一人を区別するには泉の名前や川の名前で呼ぶらしい。

「じゃあ、この大樹の根っこのところの、その小さな泉にも、います？」

「ああ、いるとも。ワタル、私の手を握ってみてくれ。その前に人型になった方が具合が良いが」

ダナさんは人型だ。当然僕も人型の方がサイズ的に色々やりやすいんだろう。話をするにしても、同じサイズ同士の方が確かにやりやすい気がする。

ただ、人型になると手を握るのは照れる。

妖精ならどこに触れたって特別な情緒的な意味合いは発生しようがない感じがするのだ。リアがあっけらかんとしているのは、リア個人の性質ということも有るのかも知れないが、妖精と言う存在そのものが人間なら時折持つてしまう湿り気の強い感情とは馴染みにくいのだろうと言う気がしている。

「まあそう、固くならず、私と握手してくれ」

「ダナさんは美人だから、緊張するんです」

「ほう？ これは人間の男が言う社交辞令と言うものか？」

「いえ、本当に綺麗だから……」

何というか国宝級の日本刀みたいな、あるいは何百ものカメラを前にたじろがない有名なモデルか女優みたいな強烈な個性と存在感を放つ美しさで、正直言つと緊張する。

「礼を言うべきなのかもしれんな。まあ、いい。手を握ったら意識を私の導く方に合わせてくれ」

一瞬、ふわつとした柔らかな笑いを浮かべた。ああ、僕はこういう顔の方が好きだな。

「チャンと私の話を聞いているかな？」

「あ、はい。すみません」

ダナさんの内部の揺らめきというか巨大な波動が感じられた。その波動に僕を馴染ませるようにすると……

（ワタル、ワタル、私に分かる？）

半透明のゲル状のうねりが弾けたと思ったら、裸の透き通った女の子の上半身だけが見えた。体つきはまだ十歳にはなってなさそうな感じだ。

（うん、わかる。君はその泉にいつもいるの？）

（そうよ。ワタルとお話したいけれど、できなかったの。だから、ダナに頼んだの）

透き通っているが冷たいガラス細工とは違う。よくできたCGで似たような姿の画像は見た記憶はあるが、こんな風に生きているという感じは無かった。

（僕に何か大事な話が有るの？）

（ええ。水脈が穢されてしまうのを止めるには、ワタルの力が必要なの）

僕と水の精霊のやり取りはダナさんには認識できている。リリアは……どうも精霊の姿が見えていないようだ。そのせいかリリアの表情は不機嫌になってきた。自分が無視されている感じで、不愉快なんだろう。正直言って、リリアにふくれっ面を見せられっぱなしなのは辛い。

（困ったなあ。出来れば君の姿がリリアにも見えた方が色々協力しやすいと思うんだ）

（私の波動がワタルともっと直接に馴染む事が出来れば、あの花の妖精にも姿を簡単に姿を見せる事が出来ると思う。ダナが良い方法を知っているかもしれない）

（ダナさんに、聞いてみれば良いのかな？）

ダナさんはリリアにも認識しやすいようにと言う事なのか、テレパシー的な接触じゃなくて言葉を発音して僕に説明する。

「ワタル、この水の精霊に名を与える。そうすればワタルとの縁が強まり、互いの力を強める事が出来る」

「どんな名前が良いのかな？」

「ワタルが呼びやすく、なおかつこの精霊に相応しいと感じる名を選べば良い。元々精霊は妖精や龍とも違い、親が存在しない。元来は自然の一部で、特別な強い波動を持つ者にしか姿が認識できないのだ」

「リリアや小人のおじさんには見えないものなの？ 僕だけが急に見えるようになったのは、なぜ？」

「この水の精霊がワタルとの意思疎通を自ら願ったからだ。それにワタルの力はまだ、殆ど目覚めていないが、一旦目覚めれば、フェドンすべてを覆う程の膨大な力だろうと思うぞ。まあ、そんな事はさておいて、早く名を与えろ」

「早くって…… やっぱり、水に関係が有る名前が良いか」

「ワタルの中で清らかな水と結びつきやすい名が良い」

うーん、泉ちゃん？ ちょっとなあ。そういう名前の女子がいたから、やめておこう。フォンテーヌってフランス語か。どっかのケーキ屋とかレストランの屋号だったなあ…… うーん…… 真澄って、野球の人だな、あ、日本酒も有ったか…… お屠蘇代わりに舐めたことは有った。うん。

「マスミにしておこうか」

どうも水より純米大吟醸のイメージみたいな気もするが、極上の米と清らかな水で出来る酒のイメージだから、まあ、いいんじゃないだろうか？

「ほう、うまい酒と結びつく言霊なのは悪くない。ここの水は酒造りに使うのだろうしな」

「ダナさんは、僕の考えたことが全部読めちゃうみたいですね」

「全部読めた訳ではないぞ。妖精になれば非常に読みにくくなる。私に絶対読まれなければ、妖精の前の姿に戻ればよい」

だが、僕はダナさんの感情なり思考なりは読み取れない。ダナさんが知らせるつもりのメッセージを思念で受ける事が出来るだけだ。

「ああ、とても気に入ったわ、マスミって呼んでね。これから」

小学校の低学年の女の子みたいな声がして、マスミが姿を見せた。ちゃんと白いワンピース風の衣服を着ていたので一安心する。足は素足で、確かに水かきが見て取れた。

「まあ！ マスミってかわいい！」

リリアがいきなり額に祝福のキスをした。リリアは可愛いもの、綺麗なものはともかく無条件で大好きなのだ。確かにマスミは十歳前後の愛らしい少女のような顔立ちだ。だがどこもかしこも、殆ど透明だが。

「あ！ リリア、それは先にワタルがすべき事で有ったのだ」

ダナさんが慌てる。

「え？」

それを聞いて、リリアも慌てたみたいだ。

「僕も急いで、キスした方がいいんですか？」

「そうだな。ワタルが知る最も清らかな水を強く思い浮かべて、キスするんだ……唇に」

（リリアの祝福のキス以上の力を発揮するために、必要な事だ）

（必要なんですか？）

（フェドンの多くの命のために、清らかな水のためにも必要だ。リ

リアの機嫌を損ねるかもしれんが)

「早くしろ！ さっきのキスの所為でバランスが崩れたのだ」

ダナさんの声は切迫している。マスミの体の中から発する光がピンク色になり紫になり激しく点滅している。

「キスすれば、治るんですか？」

「そうだ。清らかな水を思い浮かべろ！」

僕は地球の自宅の側の神社の神泉を思い浮かべた。大岩の奥から豊かに湧き出る清らかな水、その水があふれてできる清らかな小川……マスミの唇はひんやり冷たかった。これがつまり僕の本当のファーストキスなのか？

24・フェドンの水

形の上では、確かにファーストキスなんだろうが……恋愛感情が有るわけじゃなし、やっぱりマスミとのキスは儀式って感じた。でも、ひんやりした感触は清らかな水の気配そのもので、心地良い。

「良かった、間に合ったようだ。ワタルは水の精霊ともなじみが良いようだな。もともとこのフェドンの水は、一つの巨大な水玉であったものが、フェドンのあちこちに散らばったのだとされている」

ダナさんの説明によれば、マスミとのキスはマスミそのものとキスしたと言うより、全ての水の精霊と親密になり、身内であると認識されたと言うことになるのだそうだ。

なんかスライムであった頃の御先祖と今の僕との関係に、似ていなくもない様な気がする。

「私と仲良くなったから、ワタルは他の水の精霊とも話が出来るようになったわ。清らかな泉でも、深い井戸でも、泥や硫黄が溶けた温泉でも、あるいは塩辛い海でも、ワタルならそれぞれの精霊と仲良くできるはず」

マスミの説明は、僕の考えても居なかったような内容だった。

「海や温泉なんかもあるんだ」

「有る。海や温泉の精霊達は清らかな泉とはまた違う恵みを与えてくれるはず。皆がワタルと話したがっている。だから、ワタルは会いに行つてやってほしい」

海や温泉の精霊？　へええ。

「海の精霊は一人なの？」

「ううん。沢山いるけど、どれだけいるのか私も知らない」

マスミにも海の精霊の事は、あまり良く分らないらしい。ふと

気が付くと、マスミの半透明の輪郭が、だんだん薄くなってきた。
る。

「マスミ、輪郭が薄くなっているけど」

「もう、水の中に戻らなきゃいけないわ」

「戻らないと、どうなるの？」

「……私が消えてしまう」

「じゃあ、今度話す時はマスミは水の中にいて、話してくれればいいよ」

「わかった、そうするねー」

僕としては最初からそうしてくれて構わなかった……とも思ったが、どうやらマスミはキスをするために水から出て、その後、夢中で話し込んだら、水から出た状態が思いがけず長引いてしまった……という事のように、次回からは気を付けるだろう。

大慌てでマスミが泉に潜ってしまうと、リリアもダナさんも大きなため息をついた。

「それにしたって、あの透き通った子は、結構おしゃべりね。海や温泉の子もあんな調子かしら？」

「リリア、海や温泉の精霊の中には人の姿を取らないものも多いのだ。あるいは老人や男の姿を好むものもあるからな、『子』という言葉は相応しくないかもしれん」

「でも、年齢はダナさんや私なんかよりも、もっと若いんじゃないのかしら？」

そうだった。リリアはこう見えても相当な年寄で、ダナさんに至っては三万歳は越えているのだ。

「三万歳越えのダナさんは無論の事、二人とも超高齢者なんだもん
な」

「おいおい、ワタル。超高齢者って……そりゃあ、まあそうだが、

あまりうれしくない言い方だな」

ダナさんは苦笑している。

「そうよ、ワタル、あんたって、何気に無神経で失礼よ」

「ごめん」

「素直に謝るのも、可愛いのだろうか？ リリア」

「そうですね。ダナさんの言うとおりみたいです」

「あー、何か色々と話がズレてないかな？」

「確かにズレた。またすぐワタルは元居た場所に戻るのだから、時間の余裕はあまり無いのだよな」

「そうだ。地球の時間にして三日しかないのだ。」

「ともかくも祭りだな、リリア、ワタル」

「そうよ、ダナさん、そうだね。美味しいものを祭りで売るんだものね」

「ならば、それを先に急ごう」

ダナさんが言うには、祭りのような多くの存在が関わり賑やかな場所での活動も大切だが、海や温泉ものを含むフェドンの水の精霊たちと、もっと会って話をする、祭りの料理とはまた異なる効果が出るかもしれない、などとダナさんは言うのだ。

「ワタルの会うべき水の精霊たちについて、探りを入れておこう」

「あー、それより、荷物運びを……」

だって、料理というか、最初に考えたようなたこ焼きモドキを作る器具類やら材料やら、相当な重量になるのだ。

「よしよし、私が荷運びをしてやろう。その代り祭りが済んだら、ワタルと相性が良い水の系統の精霊たちに、会いに行っちゃってくれ」

ダナさんは、どうやらその精霊たちに心当たりがあるようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1304w/>

可塑性に富む僕

2011年12月27日01時49分発行